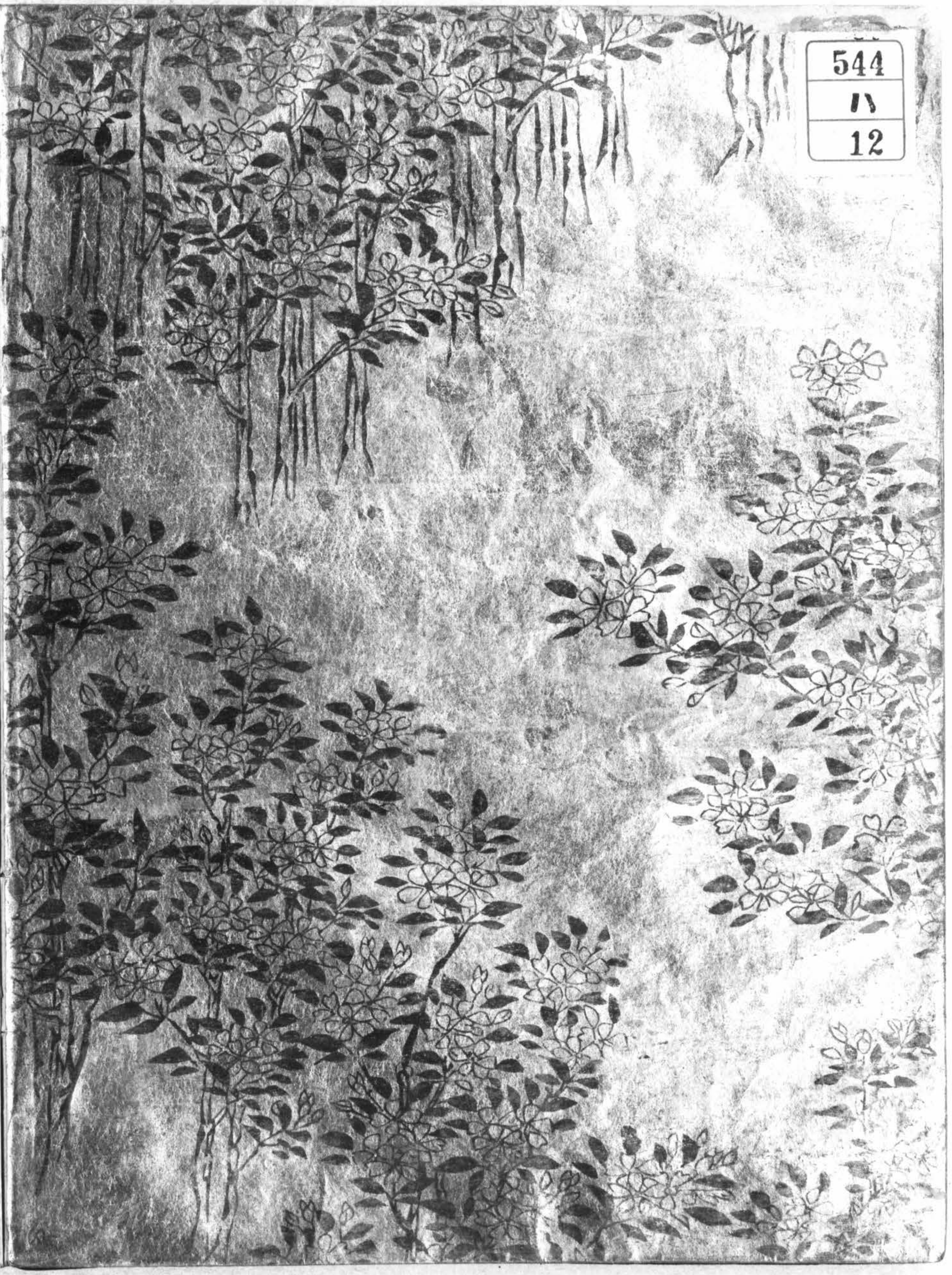
後拾遺和歌抄　下

544
ハ
12



544
ハ
12

九州大學圖書
九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182173

後拾遺和歌抄第十一

戀一

春宮と申ける時内侍のかみのもとにはしめてつかはしける　　後朱雀院御製

ほのかにもしらせてしかな春かすみかすみのうちにおもふ心を

はしめて人につかはしける　　増覚法師

木かくるゝ山のした水うつもれてなかれもやらぬものをこそ思へ

題しらす　　馬内侍

いかなれはしらぬにおふるうきぬなはくるしや人を心にかくる

女をかたらはむとて乳母のもとにつかはしける　　源頼光朝臣

かくなむとあまのいさり火ほのめかせいそへの浪のをりもよからは

返し　　源頼家朝臣母

沖つ浪うちいつることそつゝまるゝ思ひよるへき汀ならねは

或人云此哥中納言惟仲よみて侍けるを

とかくして人のまことためのとかはりてある

はしめて女につかはしける　　平経章朝臣

霜かれのをはなにたてるむすひけむすゝきかのめかさるやおもふ心を

大江嘉言

きのふつやみなしまれハ世にすまあらもんとそ人にしらせん

たとへのはせて人のもとにつかはしけるにかはりて

よめる　　口多み武綱

むかしめくるはれましとそてまれくてよなよなきてきんのはれそを人

女にはしめてつかはしける

藤原実方朝臣

かくとたにえやハいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思を

はしめたる恋をよめる

実源法師

あまんさひ人は世にある物を恋すとも思ひもしらぬ

月あかゝりける夜女にまかりて後つかはしける

源則成

ともにねる月みよの月はみし有明の光をこひはつ

まてみける人につかはしける

藤原長能

くみてしる人もあらなん夏山のこのした水は草かくれつゝ

ほかなりける女のもとにたなはたを思ひかけてあ

なたる女のもとにつかはしけれ

よみ人しらす

なか舟しけるみえつるかなきよせよいつれのおほみやしの浦
といしこと　藤原通頼
こゝにてそちなむるやとみれはよみ〳〵世すゝみあるよそによ
道命法師
世日あまりひいつかとまちしあきのぬ月をさ人よもあかしつる
八月ころに女のもとにすゝきのほにまきして
つかはしける　祭主輔親
ほのすゝきほのかにねてそくすものみにならむ秋とおもはむ
題しらす　藤原兼房朝臣
いつぬまもあきかたかたきことなけく人は目にして

萩咲く人て待けるほとにもみちてちれな
はとてつかはしける　源兼澄
口けるの神をかさしてちかひきさなきもおもひこゝろ
袂あらそひてくらひてるそ待けるも
つかはしける　中納言定頼
雲の上はさやかにさしてまひけれはこゝろのなかにいとけはなる
はしそて世のりとまたては川つりまいる
藤原能通朝臣
年ふる山下水のみそれぬけはてなる風にもみちけるかな
題しらす　能因法師

おほくの人の年思ひてやきけむといひはくへく

文つかはしける女の返事をせさりけれはよめる

祭主輔親

三つしほのひるまなをなき浦にしかならすするみゆる身はみな

返事せぬ人のもとへいひやるとて

道命法師

ちかひてわか身のうさはつれなくてこと浦にこそけふは絶れ

返事せぬ人に山寺にまうてゝつかはしける

思ひやれ仏の御山に入しかとさそ見ぬ道はゆかれさりけり

女のあたりにまかりて七月七日につかはしける

前大納言公任

雲ゐにて契りし中は七夕をうらやむはかりなりにけるかな

七夕の後朝に女のもとにつかはしける

藤原隆資

あふ事のいつとなきには七夕の別るゝよりもやまれしける

人のこゝろをたのみてまかりたるにまたこひて

て侍りけれは

馬内侍

逢事のとくおもはるよいつかともまちさえてなけくかな

題しらす

藤原範季朝臣

昨日見すと明日田よそていつくしめのいへるとは人のいひはかるらむ

うへのきぬのこと人のをきくらへてこそしけれ
けるにあまたよみの人々此歌をよませ給ひける

御製

あふ坂の名をしたのまし恋侘関の清水に袖ハぬれけれ
恋しさ

道命法師

あふまてハさしこそ人めかたからめ心てふまてハやけてみえなむ

恋し　よみ人しらす

たのめこしことハかりをまちてまんこそのうらみよ今

いつミ式部

きこゆるよの事みなめてしく見え人にあひみてし

入道一品宮に侍ける陸奥のもとにつかはしける

源頼綱朝臣

たく山のまけみちのはすのいつくてとかんしぬきて
うれしきといふことをまつゝゆけれはにこと
人におもひをしてかとしたくもすれはふもとをきて
てつかはしける

源政成朝臣

うれしきをつゝむ人にあるねをつけれはむすむ事や
何ならむ

恋しきと　平範國

恋するものとそみつる人のつきはなれて
文のよりとめてかへりまよはぬときくそつら

きら　　藤原為時

いふをむみけれハ今ハあふかりと見えいとぬるて帖を
右資朝にまゐらせて侍りし中納言宣
頼之のもとてなとつれきうるをさやなうすまを
やかんきむしたえまうらまにとちひ侍りけん

相模

あさことのちかけなりてつくれきさうあれまたよぬるく袖や
志よわれいふ侍りける世の秋よあやまて露くり
足ねいいたもといひて侍りけれハ八月てうりて
つかりきる　　大中臣能宣朝臣

まてといふ秋もちつえみ山めうそとあ花やさきて露ふ　ふえう
宇治前太政大臣家の三十講後の歌合に

堀河右大臣

あさまてとせなき今よのたり侍りしあるとこえ人のいの侍りし
やむことなき人をおもひかけたることにかゝ
て

相模

流されまね遊よるこえたるのきさやなてかきみいそゆ侍り
世のしらはつかりきる

藤原道信朝臣

あさみとりやあさとりうちなたる人あらしめみけれぬまよきの
ぬま

題しらす　　　　永源法師

恋ひてよをうらみてやらんかたもなしつれなき人の心ならねせ

つれなきを今はこひしとおもへとも恋するかさをたえぬ世の

世の中ちよに身をたのみけるにいのちて侍られよめる　　赤染衛門

身を捨てふかきふちにも入ぬへしそこの心のしらまほしさに　　源道済

たいしらす　　大中臣能宣朝臣

恋しくてあふよし夏よかへつる来いとね覚て悔しかりける

賀茂祭のかへさに前駈仕よつかまつりける人

まいるのみやのあかそて侍けるを女の車よりかく

きぬのひもときそてとられたを侍けるをさつねさ

せられと頼とし奉てやみにける又の年此祭の使下

りて舞院にまいりて侍りけるに此女みいたしたてまつりて

しるしといと懐とつれて侍られをつかはしける

かたらひむすひし袖を今さらにかくる袖をやくくるしき

返し　　よみ人しらす

夕ちよもいも神の前まし八重むすひもさへるかなとまちせまね　きん

題不知　　能因法師

わかせこか来へき宵なりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

西宮前左大臣

たよのおほみ浦こく舟のあともなく見ぬ人こふるのきみやちす
世のもとよつりしける

小野宮太政大臣女

さりともと思ふ心にはかされて今日まて世にもふる命かな

返し

たのむるに命のかゝるものならは千とせもかくてあらんとや思ふ

題しらす

小弁

思ふ人ところあれはちかくつれなき恋に身をかこやさん

平定國

人しれとわすれぬ物をよに恋つるをたかへてかへさる命とそいふ

長久二年弘徽殿女御家にて歌合し侍りけるによめる

永成法師

恋しさも命はことのかすならてつれなき人のためてそゆす

假粧紙にかきて題をさしてよみ侍りけるに初恋をよめる

中原政義

つれなくてやみぬる人に今はたゝ恋しぬとたにきかせてしかな

文にかんによもぬ人の返事もせて假粧紙に人くはよまかせ侍けるによめる

良暹法師

あさねかみみたれて恋そしとろなるあふよしもかなもとゆひにせん

藤原國房

かゝれとて津の浦のしほせたひをまちけるよ年のへぬらん

関白前太政大臣家にて人々経年恋といふ心を
よみ侍りける　　左大臣

つれなさのためしとかへるたひをはよそに年ふれはこひまさるらん

太政大臣

年をへてかはらぬ山のしたもみちやつれなき人の心なるらん

はじめけるをたのめやける人のさとにおとしありて
けるほとにえ侍きれてよめる　　道因法師

うきこともおもふへかりけるくと
いとゝろけけのうちにこそすれ

後拾遺和歌抄第十二

恋二

女にはしめて文の日つかはしける

祭主輔親

わとゝなくまつ心をちゝにやさてたゝる年八へぬしら
実範朝臣の娘のもとにかよひそめてのちのあしたに
つかはしける

源頼綱朝臣

いかにへの人さへきけはつゆけきをおもはれなとかかへらさるらん

惟任朝臣にかはりてよめる

永源法師

東路にゆきてかへるこころあるやまつれなくやありけむかはしけ月
平×朝臣の娘のもとにまかりてあしたに文のあ
したによめる

藤原隆方朝臣

夢しまハ夜をせぬをとゝむる心ちしてまへまてとふくるしかりけれ

題しらす

源定季

はかなくも忘れぬのまとろむよハなかなかおもひかゆるさ

女のもとよりかへりてつかはしける

少将藤原義孝

君かためをしからさりし命さへなかくもかなと思ひけるかな

人のもとよりかへりてよめる

伊勢大輔

其夜ハ暁侍るならてまたいさ心をかけてたすきん

女のもとより雪ふり侍りける日かへりてつかはし

ける　　藤原道信朝臣

かへるさの道やハかはるかはらねととくるにまとふけさのあは雪

明ぬれハくるゝものとハしりなからなをうらめしき朝ほらけ哉

まつ人のもとよりかへりて侍りけるにはさらに

あんくるしとてそ侍りけれハ恋しとよめる

ちかの浦に浪よせかくるたちまちてゆるまぬるそてもなみ　つらき

たいしらす　永源法師

逢ことのはこえ恋ハまさりとつれなき人を今ハうらみし

女をとらよつかはしける

西宮前左大臣

うつゝにて夢はかりなる逢事をうつゝはかりの夢になさはや

題しらす　藤原道信朝臣

なよさくハゆきあふ坂の関にあらねともゆきぬへくもおもほゆるかな

清原元輔

ある人ともうそやみぬる事をいひて涙の袖よもしるし

たとこみえてといふをきかせて侍りけるにも

よみ侍ける　相模

たのむるふしもみえぬいまはおもひねをのみ待となくなくそまつらんや
とけくねいふたところにゆんやたてとりて
まちかねてよめる
たのめてことありしよひとよしてかならずみえんとてこそ
中関白少将に侍りける時はらからなる人にお
いひわたり侍りけるたのめてまうてこさりけるつとめて
女にかはりてよめる　赤染衛門
やすらはでねなましものをさ夜更てかたふくまでの月をみしかな
人のたのめてこと侍りけれはほとなくてつかはしける
いつみ式部

たのめつゝおもひつゝねよとねせぬかなよのまは霜のおきてよく
越侍る京のひとにまかりてといひおこせてなとせさる
にかへよめる　大輔命婦
夕霧をまちらぬ人とみえしおきまかせて袖によそへてしをりつゝや
若のほにつかはしける　藤原隆方朝臣
いかにせむわすれやすくの此日やけふみゆるよのかなしきに
題しらず　章本
むかしなよのなかのさかりにおほえける人の心をしらぬひとも
題しらず　源重之
まとのへとみえすくさかもとに人の名はよはかつるものに

女のもとにまかりたりけるにかくれてあはさりけれは
かへりてつかはしける　源師賢朝臣
かへるさはわか身ひとつとおもひしにこころは人にとまりにけれ
なれたる侍従女のもとにまかりけるによるやよふかく
ありねといひ侍けれはかへりてのあしたに女のもと
よりつかはしける　よみ人しらす
あま雲の入るえやとのもゆるところせけやそぬれし袖
おいさ侍けるたとこのさるなとおかまひてよふ
まや侍しさやともしれんとよめる
一宮紀伊

わつらふことありける月ならし夢ににたるかけをみて
大弐三位もとよりいひ侍ける女のもとのつらくは
又ものいひてもおもふ女のいひ侍ける門のあく
よるまてわすれ侍けるをいそひてきこしめんを
むかしのことをつかはしける
陸奥とし侍れ
ともて有明の月をまちてちかへるなほいまはこれなれ侍れ
かへし　大弐三位
ときすてらかたるまてたいおもかれなし心のうちをいふて一
題不知　和泉式部

はかなのよのなかやとも人をおもへきみをもよころなるらんものやつは
さ伸ねにすみ侍るけ時このひとき人にとく
小おとすまかりく侍るれんよある

高階章行朝臣女

人めも草もかれける山のおくてらくるしけ世をも思ひ侘ぬる

たいしられ　読人しらず

こぬしくるしくるしけれてついかなるかはよ思ひてなん
人の心ともみれおやまして洗ておいふ人侍きこゆ
をたやすくつきそいひ侍るれんたとしのよそてきこえ
るれかへりよろしときこえてめよつかたてつかりきこゆ

きつしめやかこゑ人めをはゞかりてあのせすよるこゝろハとやかへさる
この心ておもひ侍きこえ候ふ思ふかたまへん
打ともしき人たとのおもひやうけよハなとて
名たちたるのしるよかくちなむとのみきこゆ

相模

をろかもふいつとく返事のかへりむすはるるよハの下冷
おいゝむかへるたこのうちをせみなるちやこ之
アきをも思ひ事かよある

赤染衛門

関白ハせよかるやきこえおはせに関おさまりそよくるこそよ侍共

道済か田舎へまかりくたりける時女のもとより
つかはしける　　よみ人しらす
あむえてハおかぬへしやと心みるなとハうらしけれまくる
そろるぬきやなほんかくしひける女のもと　きる
よまかとて枕にかけつを侍ける

右大臣

口心をあるもいのてつかえんよりなにとこの事ことせ
おとこのもんといゝをさ侍けるを侍りてゆよ
けふはとハせける人につきを侍る乱しちて
あかすくおもひてよみ侍ける

よみ人しらす

こゑそれしまふかしねをるゝかくみゆにいるけこのゆきを
入道摂政九月はかりのことやまかりて侍
きたりつとめてすこしをこせて侍ける返事に
つかはしける　　大納言道綱母
きえかへり露もまたひぬ袖のうへにけさハしくるゝ空もわりなし
中関白女のもとよりかへりて内みせいる
てとくねつるかへりて侍に名たちよめる
高内侍
暁の露ハ枕におきけるを草葉の上となに思ひけん

おとのするにふきておもふといふ心をよまれたるところ

相模

きのふけふくもゐとみし心こそ世はおほふりやまやありしと すん

雨のふりける日なりけりの雨の袖になるといふ心をよめる

人に　　　やまと式部

みつ人にゆかしてこそ袖にこそ身をすて雨はいつとえやまね

補親おしへ侍るせのもとに人は雨のふり

かはるかはてるとへいはるゝ事によくや

みかおほとてせのつかしきる

よみ人しられ

いとゝさへふるあめはかはるねに袖ぬれにこそかはかされきし

とみなてかの子せの文こそ人はよの子とききて

つかしきる　　藤原雅通朝臣

おそふきし流をえたちて其の松は代かさてとのこたのせきる

かはし侍るせのこと人におひ子ときまてつかはし

りける　　藤原実方朝臣

浦風になるなよふる雲のあゐのたくもの子心よりくれ

清か納言人にいはせてさへぬ中まて侍る

みえしくなとつれ侍るかきたれはよくきて

おもふといふを侍るかとせさしおれてもすなはち

ねといひきけれはよめる

わすれなはよしよかりけり忘れなはよにもわすれしみちさへくけり

たとこれくまちなと侍きるはよめる

よみ人しられ

風のをとの身にしむはかりきこゆるはわか身に秋やちかくなるらん

これくちかるたとこのおもひつゝくなといへるは

大弐三位

ありま山ゐなのさゝ原風ふけはいてそよ人を忘れやはする

右大将道綱久しくをこせとるせうそこ見えね

ことはりを侍けれはとゝめよかへて

赤染衛門

うすきも今はえてしとおもふころそせてつけの身よりかし

来しとふちいしといひてよみ侍けるたとこのを

よまつりける

和泉式部

たましひくわるはくころたとかへぬけれはよは今とはまし

たとこうむるまやあやきんなみとかきまそて

まはハさしきなとせしといひて侍にわれとかく

思れまんおもひつるをさるまて侍けるによめる

赤染衛門

おほかたはゆるゝつゝふれぬへしけ上そとくさね今もは

題しらす　　藤原長能

いさゝとハ言ねかつるらんかよわるねむてくるをわ

七月七日二条院御方にたてまつらせ給ける

後冷泉院御製

あふ事ハたなはたつめにかしつれとわたらまほしきかさゝきのはし

後拾遺和歌抄第十三

夏三

陽明門院皇后宮と申ける時ひさしう内にまいらせ給はさりけれは五月五日内にたてまつらせ給ひける

後朱雀院御製

あやめ草かけし袂のねをたえてさらに恋ちにまとふ比かな

服に侍ける比土のさうふ人につかはしける

清原元輔

藤衣つゝし袖のいとよはみたえてあやめをぬ程ふかき哉

高階成順石山にこもりてひさしう侍り

さはる事侍てよめる　伊勢大輔

みるめこそあふみのうみにかたからめふきだにかよへしがのうら風

おもひそめて又もおもひける女につかはし

ける　厳覚法師

秋風よ今はかへるとも…とのみぞうらめしくのこるをとこゆかん

ほのかにおもふさまありて京なる女につかは

しける　大江匡衡朝臣

恋しさはそのこともなくわかれにしみちのおくにぞいまはまさらん

源遠古がむすめにおいて侍けるまゝにしもふ

あさましきさまを又人々あはれとみ侍るにや伊勢

国よりのぼりて恋しくおぼえけるに人人

もおなじさまにやおもふらんといひおこせて

よめる　斎宮内侍

先立てぞめのうちすさみえし…のかれの末にかん…

橘則光朝臣陸奥守にて侍けるにまかり

まかりくだりてまゐらんありといひおこせて侍

けれはよめる　光朝法師母

かなしきはみくの袖にこぼれつゝいそぎなくさんとくるまをぞ

とよみける女につかはしける

藤原国房

恋しさハ思やるたになくさむる心ならねハ方こそつきせし
人のかよひける女をさらのひておはしけるまに雨
ふりてかへりけるにこの女をたとへぬ中へおそ
くおはしけるあふさかの関にゆきあひてせんかう
なく思ひかへして人をかへしていひつかはしける
大中臣能宣
いにしへを思やるあまりたかまさはゆきはふる坂の関なる逢せ
かくし
よみ人しらす
ゆかぬ身をはなにおもふこのてはあまりにゆるかたきあるす
わたりはかたはまる人につかはしける

民部卿経信
あつまちの秋の空をそ思ひやりこそすみける月をみるあてに
しもし
康資王母
思やるまさる雲路にいつる月をおなしのなかめやはする
あなたなる人につかはしける
左近中将隆経
かへるさはすかたかへりてやらん人とこそ月はみえけれ
へし
康資王母
東やのやすらひかねていさよひの月の都にすみけれ
たいしらす
右馬惟規

霜かれの冬草はおきまよふくに思ひはなれてすくせにあれ
はへまかりけるにある人の許といふ事を人に
思ひやりてよみ侍りける

増基法師

かれはてゝ後は人たれとおもふことのえたかなるをみる時なれ
と筑紫に侍りける女につかはしける

右大弁通俊

思ひやる心の空に行く人をおくれつゝあすにまかりしかは
清家かちのともにはりまの国にくたりて侍りける
時にかの国にあひ侍りける女にわすれ侍らて

ちちの国になり侍りて侍りてあらはの侍りに
なれを女のもとよりつかはしける

よみ人しらす

心をしやりてみなみなれをやすみまゐらせぬかなれ
たのめつる事のなさけありしにそ侍りしなれはよ
み侍りける

律師慶意

世のなかを侍りにける後はぬれはまのなをよそにてぬ（行）
源頼綱朝臣のもとに美濃国に侍りける時
かの国の女にあひて又これも侍りけるなれて女
のよめる

よみ人しらす

あすまやのみしは扇かとと子殊しけるを殿上人のとりかへさゝりけれは
中納言定頼のもとにつかはしける　大和宣旨
はかなくも忘られにける扇かなおちたりけりと人もこそ見れ
題しらす　大納言忠家
いかなりし時しくれしかんゆかえ人のおもふにかはらん
おとこありける女を世のきこえてはゝかる人侍りけれは
ひまなきさまにのみきこえつゝ侍りけれは女の
いひつかはしける　読人不知
わかやとの竹のうへのことよせてやそれしけける忘草かれ
時資朝臣大弐にて侍りける時おもひかけ侍
りける人経てしはす宮こにまかりて侍りける車よい
送させて侍りける　皇太后宮陸奥
あふ事を今はかきりとこゝの山枝のうへすみならん恋さ
五節はてゝ侍りける人をかゝるたねむさと子
枝かはれぬるをとせよなれ女にかくとてつかはし
りける　よみ人しれ
枝むすといゝてまかりしはみえぬ人もおねぬとこゝの山もと
題不知　相模
とみのみちますみぬるとも人しれぬ心のうちのはるゝかな

四月まつりの三井るに侍りてむさしくさと
し侍りけれはよみ侍りける

僧都遍救

あふ坂のせきのあなたやみちのくに人すゝしく人のけしきみえてぬめる
かたらひ侍りける童のことを四月つきかれにしを
しるともせて侍りけるをさりよあかれにしかは
たよりてつかはしける　前律師慶暹

ちる人をしみてねよや花すゝきむかしのこひさにやは
わすれしと契りける女のひさしうおとつれ侍らさりけれは
はかりしまれ　大中臣輔弘

はかなしや四月まてそよみつよし四十あまりて心なき世
名てうとゑぬ人のもとつまにて侍りける文をとらせ
せけれはか侍りけれはよめる

和泉式部

なつくまくらまもしかやくさせすつて猶よあらしよし
影しらん
うきせをはなるくさめん四月まてすきとハぬ事や
おいかたりや侍りける女おやるとまたしれなし事
あはててなくるよもかねハさかりしられをよめる

源政成

あはれてやかなかきなるとてなしあとさハつきせぬあはれ
そまさる

伊勢斎宮わたりよりのほりて侍ける人に忍ひて
かよひける事をおほやけもきこしめしてまもりめ
なとつけさせ給て忍ひにもかよはすなりにけれ
はよみ侍ける　　左京大夫道雅

あふ坂は東路とこそきゝしかと心つくしの関にそ有ける

さかきはのゆふしてかけしその神にをしかへしてもにたるころかな

今はたゝ思ひ絶なむとはかりを人つてならていふよしもかな

又たゝしてむすひつけさせ侍ける

みちのくのをたえの橋やこれならむふみゝふますみ心まとはす

心さし侍ける女のことさはりありてはなれ山にこもりて

侍けるほとによみ侍ける　　前大納言経輔

恋しさは忍ひやはてむまさるらむ心さへこそうつしのこりけれ

中納言定頼かよひ侍けるをたえて侍けれはいひて侍て

おとろかしけるほとにつかはしける

相模

ありとてもたのむへきかはかはるらむ人のまことをいひてこそみめ

題しらす　　和泉式部

世の袖にかゝるなみたのよるへかな見えぬかせそかよふへらなる

くろかみのみたれもしらすうちふせはまつかきやりし人そ恋しき

ある女に　　　清原元輔

うつゝにもすくる夜しもたえぬれハ夢のかよひ路なにゝたのまん

たとこよ(?)ゆすまて紫来てこてそ夜侍ける

みかはのたえむよしすれつもそ侍ける

　　　　和泉式部

なけかれぬるをいくちとてしねとハんすみもの心ほそさに　しれ

題不知　　　相模

なかゆかつらき山の岩はしハなかみちにもかくたへぬる

二條院に侍ける人のもとにつかはしける

大貮良基

ゆるしなむとたのまさへしてまかりかねつゝかれハしるし

題しらす　　　二階良成

わすれなむと思ふにつらき我心やはまゝにならぬものから

いかにせむ夢たえつゝなけくかなしこの世にはねと思ふらんハ　　大納言忠家母

あふ事のかたきいのちはなるとも猶まちかねて

　　　権僧正静円

あてちまいすと侍ける人のもとにつかはしける

　　　和泉式部

あらさらむこの世の外の思出に今ひとたひのあふ事もかな

ちゝのともにゑちこの国に侍ける時をもくわつらひ
て京に侍ける斎院中将かもとにつかはしける

藤原惟規

都にも恋しき人のおほかれはなをこのたひはいかんとそおもふ

たえてかれはてたる人のもとにつかはしける

周防内侍

契しにあらぬつらさも逢事のなきにはえこそうらみさりけれ

題不知

左京大夫道雅

涙やは又もあふへきつまならんなくよりほかのなくさめそなき

西宮前左大臣

つらしとも思ひてを忘れもやらて人をうらみしとてひとかたにせよ

七月七日に女のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

としのうちにあふをまれなるなをとりて日よ七夕にいまる人や

増基法師

七夕をとかとえてわすれしもえてはあふをねためしとそなる

題しらす

馬内侍

年をへてさへかけつゝみるへきさかよのいのちそこなるみてまし

後拾遺和歌抄第十四

恋四

心かはりて侍ける女に人にかはりて

清原元輔

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとは

中納言定頼かれ〳〵になりける

公円法師母

わすれねのつらさみなからさえぬる恨とね袖も波ハ立ける

年ふれとあはぬ人よりあひてはつらしきる

道命法師

おもひしをみすてしとかくてはみえこけれは

題不知

藤原元真

夏山のならしやとねし子まよいとしたのもしなさる

恵慶法師

いくらのかみしこしとゝしたてはわすれそいつまて

曾祢好忠

あさまたきやまとほきわかやまに人をとときしかな

やらぬ武部

やまといそてつれなくて人つれて人こころは住まれき

このひて難しきさらんなめる

よみ人不知（相模イ）

あさくれわたるかれぬ人は秋の夜しのねよりのことぬ思ひを

西宮前左大臣

うらみのひろくさせしかど忘らるゝハ多よそてまけつれ

永暦二年内裏乃哥合によめる

弁乳母

恋しさも涙も冬のなるみせハさりてハ人下さるゝ涙し

題不知　源道済

人しれぬ恋みしなんおもらみ世のなかに我と人やおもはむ

さしのさらむ女　堀河右大臣

人しれしとふかき袖をおもひてねくらんをとすつくさめよする

冬の夜の恋をよめる　藤原国房

昔見し人を恋しみ秋よわちるや涙のこぼるゝかな

題しらず　清原元輔

ねくずもなんなるくさまりすゝ人を恋のうらそ知らる

よみ人しらず

世の中におもふ人のつれなんおもふかしる物ハおもしけ

道命法師

よるくいめのはしめて思ふ心をゆかまでたどるつすらん

平兼盛

なけてふことハいくそたひも思ひおもひつきも今ハつらしと思ひ

をとこのたえ侍るころしかとへてつかはしける

中原頼成妻

思ひしるらむきまゝに途行人の心そうらやまれける

題不知　　能因法師

わかやとの梅のにほひはおきれてわかしく恋のまさる哉

相模

あやしとこゆめとてのかゝる梅のかほるとかける袖そうらしん

和泉式部

世の中に恋てふ色ハなけれともふかく身にしむ物にそ有ける

あふともみしらぬ世なり

清原元輔

さかねのいつらう人をあふとひて心なくさめてそやまれ

堀河太大臣のもとにつかはしける

大弐三位

恋しさのうきにまきるゝものならはまたふたゝひと君を見ましや

題しらす　　藤原有教

あはれこそ人をつらしと思ふにはいのちもしらぬものゝ心に

露をきたる萩にさして女のもとにつかはしける

源道済

庭のおもにみ萩の下葉て声たてゝなくしか思ふ人のよひの数そ

題しらす　　相模

わか袖を秋の草葉にくらへはやいつれか露のをきはまさると

あやしきみのをはみてこ房を見なれてひまもなくみつのまに[illegible]

藤原忠経

かくすまし見るらむとおもふをみるまゝにつきの数まさるらは

二月ゆきふる日人のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

つれくと思へはなかき春の日にたのむこととはなかめをそする

五月五日人のもとにつかはしける

和泉式部

ぬますみ竹のあやめのつくくと思へねのかゝる袖のぬれし

題しらす

しらぬまにあやめはさけりと思ふ人にあはんと思へめ

あさからぬ心をちよにそひとりやせぬのまくら有まし

みしる川おもふかはかるかも恋をはあさくぬ物にそありける

小弁

わか恋をはしらの池のうきぬなはくるしくての年をふる哉

源道済

おもひにかゝるとはみえて五月雨はわか思ふ子袖みちぬれにこそあれ

西宮前左大臣

ちるよする人をあめとやおもふらしわかめにちかき袖のしつくを

はまちてうきまのこみれはわすれてはやそぬすもあ南

天徳四年内裏の歌合によめる

藤原元真

君こふとかつはきえつゝふるほとをかくてもいける身とやみるらむ

題しらず

恋しさのたえすおもひかけすならいはいきるかひなきからましこん

中納言定頼かもとにつかはしける

大和宣旨

恋しさをたへのひもあかぬせみおへつゝ心よわくはよそゆかは

小弁かもとへつかはしける

源頼信

忘るゝめおつゝのさるみえぬてうつゝぬけみてうせしかしねを

題しらず

西宮前左大臣

松山をおもひかねてもことのこゑをかくるあをやなきのむくひはらはせ

はしるへおもほえて袖もはかなくもおもひかはぬねこけ

せうとにつかはしける

入道摂政

たなはたは露の命をかきやすきことのへんにけよかし哉

題しらず

相模

やとの小松のこすゑにこたへてけさせぬとこのうらみそれ

永享六年内裏哥合に

恨わひほさぬ袖にはある物を恋におちむ名こそおしけれ

題しらす

秋の月よはの時雨にことよせてかはしく袖をたれしかはらむ

[illegible]

さよくまねをとなふるものをうらみすまゝわかる袖や

藤原長能

わか心かはらむものかかはる色のさくらあけ色も世ひて　ともみしてイ

れしくおもひ侍りけるたとこにはよめる

藤原元永朝臣女

しらへてくゆかりくるいそ袖にすみぬるのゝ子あら雨

題しらす　和泉式部

人の身も恋にはかへつ夏むしのあらはにもゆとみえぬはかりそ

あかしかねひとつのとこにみしやさやかくさこそねさめくるしき

女のもとにつかはしける　入道摂政

わか恋はみの上にはけてみえねとそへもかめまも人みえそ

返し　大納言道綱母

恋の時にはなるゝ心のあやにくにつらきとみえしゆるとこたへん

たいしらす

入道摂政

吉野山のゝ時にわか身こそとふみねともえかれね
氷なゝ年ゆきの下にまよふる

相模

いつとなく心空なるわか恋やふしの高ねにかゝる白雲

堀河右大臣

うしとおもふにあひみぬ恋をさへかけ袖まさるらむ

題しらす　源重之

松嶋やをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

殷少将

かはかりと思ふにつけぬ涙哉袖もくちぬへくわよ

雨のふるよよめる　藤原長能

かきくらし雲まもみえぬ夜の月雨はさしても思ふわか身ゆゑ

題しらす　相模

るゝこそあまのみのみとはよそにしるめるてふるあめもまた
つれなきをわかみへしめけるたとへのもとゝつゝり
ける

和泉式部

しほなれしなかたのまかろふしたとへていへえ
そさしかゝら

後拾遺和歌抄第十五

雑一

題しらす　善滋為政朝臣

年ふるハあれのまさる宿みれは心なくもとむる月や

宇治忠信女

月影のいるをおしむもくるしきに西にハ山のなからましかハ

菅原為時

われひとりなかむと思ひし山里におもふ事なき月もすみけり

船中月といふ心をよみ侍ける　源師賢朝臣

みなれさおとらてそくたす高せ舟月の光のさすにまかせて

池上月をよめる　良暹法師

月の色のうつるハ池の光をもへたつるとも思ひくらされ

後冷泉院御時后宮にて月をよみ侍ける　大蔵卿長房

月影ハ山のはいつるよひよりもふけゆく空そてりまさりける

遠来月をみるといふ心をよみ侍ける　源頼家朝臣

よそ人の花のちるやはれぬらん月のさかりはいつこならねは

月のいとあかく侍ける夜来りける人のまね

しあるしかひきまするもあらなくてつらゝかり

備前の六條の家にまかりけるに来まして

なれて人もあるしと思ひ給へけるに人々あつまり

家のはまに出てぬるくやへころ池に月のうつれ

るをてらしてるをあてゝありなんと侍りしかはおほす

もてなすものとてよみ侍りける

懐円法師

波のはなよの川やかなかし見えなる月みるこゝにそある

中納言泰憲近江守に侍りける時三井寺にて

歌合し侍りけるに月をよみ侍りける

永源法師

いつくにも月みえてねやにいるひとの雲のまよりもなかれ

永承四年内裏歌合に月をよめる

江侍従

やまのはをいてさるけふの月なれはなかむる人そまさりける

麗景殿女御家歌合に

堀河右大臣

山のはもみえすかくれやしつらむは波のうへに入るとも月はかはらさりけり

題しらす

加賀左衛門

やとことにかはらぬものは山のはの月まつほとの心なりけり

依月客来といふことをよめる

永源法師

望日よりやさるあてのさやかなる山寺の月ハおもひよりせ六

賀陽院にわたらせ給ける時石清水既たとし

ることて此殿しけるに九月十三夜よみ

侍し　　後冷泉院御製

いにしへもあらしやるみやはすみにつまらぬ月のこゝろのさけて

月乃宴中納言宗親もとよりつかはしける

輔仁親王

いまあらぬ我から宿の外までに八人心をあらぬ月をとゝさ

その夜ハちかくて二三りんかあるそて雨の

ふりけれハみこのもとにつかはしける

中納言宗頼

雨雲ハわかやのうへにすてつれとやとる月ハ秋しれるそ

人のとわれよめ月いてよといひける也

よみ侍ける　　藤原範永朝臣

月そかれし心もろくさそはぬ夜を花山のかたとさそふらん

左やまの御ついまやしまそて侍きん比賀茂

此歌よまつくりやてゝいのかしけつる月の秋

ろく侍れて　　賀茂成助

かくばかりへだつる月をながむるは心にもちれてこそよし

くもゐにすみ侍けん人の月みしと思つゞけられ

なるまゝに此山をかくこそはおもひそめ侍る

ことまして

斎院中務

ともなくて秋の月みまやけるをとやらむこの山は惑ひけり

人に

斎院中将

ころもまた山のは出し月なれど契りし忘れやはする

月おもしろく侍りし夜小一条のおほいまうちきみ

むつましきこともなくてよみ侍りけるよめる

清原元輔

あまのはら月はかはらぬ光にてあかぬむかしのよをやこふらん

月前に思ひ出そのことゝいふ心をよみ侍りける

右近実経朝臣

いつとてもかはらぬ秋の月みれはたゞいにしへの空そ恋しき

前栽人々そ侍りける時対月懐旧といふ心を人

〳〵よみ侍りけるに

源師光

住なれしさやけき秋の月をこそおもはぬ空の雲のはて

斎院長官のもとにあるとしみやこにわたり侍りけるに

かの所まかりよりける法住寺とゝいふところに

あそひて侍りけるに月をとこそて

民部卿長家

もろともにおなし空にはすむとも宿にはなとか月やとらむ
道済かたに月すむ人にたのむとよめて 返
なとせさりしと云れたよみ侍ける

江侍従

月はなれ山のはたかく出るよをわれとたえいれし人につけまや
たれよかあかしける比山寺にて月を見てよみ
侍ける

源為善朝臣

山のはに入ぬる月みましかはあふこともなき世の中に又入ぬへき
山にすみはつることてあまたよみはてゝよみ侍ける

小一条より入たちく又見てよのたえみえけるに
すみのほりたる月のおもしろく侍りけるをなかめて
よめる

聖梵法師

むかし見し月にかはれるかけそなきわれとゝもにや山をいてけん
中関白の忌に侍ける時よもの山のいとおもしろく
とて月のいとあかく侍けれはつ
よめとありけれはつかうまつりける

赤染衛門

入ぬとて人のいそきし月かけはいてゝのゝちもひさしくそみし
またいあけんおりしも十五夜にてぬるとさゝれと

おほしめしける比月のあかゝりけるを御覧し
て　三條院御製

心にもあらてうき世になからへは恋しかるへきよはの月哉

後朱雀院御時上月あかゝりける夜人
にのほらせ給ていかなる事か申させ給けむ

陽明門院

今は只雲ゐの月をなかめつゝめくりあふへき程もしられす

おもふといひてさそひける人のもとに月のあか
ゝりける夜つかはしける　小弁

たのめすはまたてぬるよそかさねましたれゆへかみる有明の月
をし　小式部

きのあとはかなくてわたる春かなしむかしのかゝみ有明の月

月のおもしろく侍ける夜はしとみもあけて
侍けるをたまひけるとていひ入させて侍を
見てよめる　よみ人しらす

都にておもひやるらむとふ月をみる人ことに人をおもひて

たのまれぬるとたのめし女のもとに月おもて

見まかりて侍ける女におくりてめて女

おもひ侍けるよめるかへしてつかはしける

藤原隆方朝臣

よしさらはおもてねかひをとけてこそすゝしき月をぬきくらん　清輔

月の山みれたゝふりむかひとせるを見てよみ侍ける

僧正深覚

ちかひし八月の十五夜あかれわか山のよそにかくれなまし

侍従のあやまりてさかしまにかりけるとてつかはし
ける

藤原範永朝臣

山のはにかくれしあとてゆく秋の月のそらをしらすやこよひまとし

月をみてよみ侍ける　中原長国

もろともにおなしうき世にすむ月のうらやましくもにしへ行

入道摂政おりゐましてねやの月みていひける

かたときもまたやはへもまさるなていひさくはとある

むといひ侍ければよみ侍ける

大納言道綱母

いかにせむ山のはにたにとゝまらて心のそらにいてむ月をは

月のおもしろかりける夜入道摂政まうてきてお
かへりなむとし侍るとてたのめしおきてまかりにけると
いひ侍れてよめる

くもゐみし月とやかたみおもひつゝあかすはいつしかまさる

村上御時人々のかたみまゐりて侍るしく人々とのことも
あまりなかくあかたてよみ侍ける

斎宮女院

かくれぬにおふるあやめのみはすててくちはつるこそなほあはれなる

題しらす　　若狭守通宗

川しやおもふのいけみのしけぬおはしともしれやくさのには

六条前斎院に歌合あらんとしけるに右

に心よせありときゝて小弁かもとにつかはし

ける　　小式部

みかくれてすみやせましかくれぬの人にはなにもしらぬ心を

返し　　小弁

きしとほみたゝよふ浪は中空によるかたもなく歎をそせし

五月五日六条前斎院に物語合し侍るへく

小弁おそくいたすとて　かたの人くこめて

つきの物語を出し侍りけれは宇治前太政大臣

かの小弁か物語は見ところあるとやおもひてこ

とものかたりをとめて侍りけれはいはかきぬまと

いふものかたりを出すとてよみ侍りける

ひきすつるいはかきぬまのあやめ草思ひしらすもけふにあふかな

下つけの国に侍りける人のもとにつかはしける

さためなくなにはのうらにつかはしける

馬内侍

ゆかしさはあかすもわかれてきくのあさとをえたる人はなきとかはな
はべる人の返命をきゝ侍るまでもなかりて
又の日いひてたてまつりしなとある也

讀人不知

思ひてよむことのかなしさをよしつきせさせぬ命ならせは
まつりて出すに侍る比人のよみて侍るとなん
よせたるとみえ侍るを

中務典侍

山里はつねてよむと思ひはつらけんとなとすみなれなん
馬内侍のもとにつかはしける　秋宮女御

夏のことおもひわすれぬ世の中はいつとりんとかたきこえ侍らせぬ
ある人のいふほとにつけてさしおきし
侍るまてかなしを

相模

あさてもおもふことはれぬまゝのつれつれとして
たとへのまとにおくものかたるにいふよし
まめやかにしなさせ侍るましきを
のかれをあはれならぬをいてきたる杜の下草國なるは
土の子事あるもて中納言基頼土のひてかなしふ
ときこえたとへて侍るを中納言さへ又つれて
よ時侍らぬなん世のよみける

よみ人しらず

いつとても身は時やとてつらね人めかなとも思はましかハ

右近衛の左大将道綱しのひ侍りける比つか
はしける

大江匡衡朝臣

あるゝ人は又ぬきかゝるかりみえ人さたしいつゝつるとおもひけ
宮備朝臣にたえてくらおもてかへんなるとあり
ければ時しはしはれはとてめよめるといふ人侍りければ

源雅通朝臣女

思ふやと心かるらん聞てたにみのうきはいかゝやハする

遊野へまかりて人のもとへつかはしける

道命法師

なすなよひすゝるとまかひ人よのさるみえんはゆふこそ聞かねむ
思ひんとりのあされける人のさしあはねましき
なるもかれたるよみ侍る
わすれといふ事つゝ中宮のすほうゆへこそいふものあれ
名こそあれとせぬ人のもとへ
おいせ人の心をみるこそやそとられてやさぬへきまつれ
後涼殿院にせさせ給ひてせの中しけ事たつと
思ひそれにもおはして侍るとは三条院位て
つきせ給ひては七月七日にまいらせ給ひませ

事侍りけるによめる　周防内侍

天河おなしなかれときゝなからわたらむ事のなをそかなしき

源頼光朝臣にめしをくれて侍りける比霜のふかゝるあしたにつかはしける　小大君

あの比のよはみね覚は思ひやりいかなる朝の霜はをくらむ

大弐国章妻なくなりて秋風寒かりける比よしなはつきていさゝかこせ侍りける也ましとて
つかはしける　清原元輔

思ひきや秋の夜風のさむしきをいもなきとこにひとりねかねん

まことぬ頼も絶ぬるとあるをよそにきゝてけふの事なとん口すさみといひわすれては
ぬ頼むにつかはすとて人のもとの上も絶ぬるをまた
つかはしける　中務卿具平親王

いかなれは花のさかりにかゝるぬをとゝめてはしみ忘しかるらむ

能宣朝臣もとにては寛弘九日のつとめに寝にはつれて
て侍りけるに大江匡衡かもとよりおこせていひ
をこせて侍りける也ましていひつかはしける

祭主輔親

すみそめのあはぬ衣をかさねきてなみたはしみる人の袖や

又ちみの国にまかりて下りけるに其の子のことを子

ふしえやうみし人をとふらひけるにその人なくなり
にけりとききて　　能因法師

浅茅原あれたる宿はむかしみし人をしのふのわたりなりけり

ちよをとくれ侍て又の年そのはてするとて
てつれ〳〵に侍るゆふくれにひらひつかましたること
なとなしのこひて川とはちるなるとも今はいつとなる
ともすはなれたおなしつるしけるをたえ
なりける人のあとをとみけるかはわかことのね
まけてねてをしきちとのひをこせて侍ける
をはのよめる　大納言道綱母

なき人はおとつれもせてことのをゝたちし月日そかへりきにける

母におくれ侍りける比をこかゝのるくまとすゝめの
人くましてきこえけれと四の日は人すきてつゝ人に
侍りけるなれ　源經隆朝臣

さそらはなひらきつるをはかなくつくるす人なとにひきける
なかたれはなきとき比時雨しくなりにけるなかとにきこえなと
のちくれはちると人のをとつれて侍りけれはよめる

少将井尼

人しれすをたちける涙のなかせは来てみし時雨ふるとこそおもへ

夜中宮しせさと行て又のとしみな七月七日

宇治前太政大臣のもとにつかはしける

後朱雀院御製

こそのけふわかれし星もあひぬれはさきさくらさかりのにほひなりけり

後朱雀院うせさせ給ひてまたのとしのはる

事侍ける比花のおもしろく侍けれは

小左近

え念さはよそへてこれは桜花おやさえねやまとなるまし

先皇太后宮せさせ給ておなし年その宮の

梅乃花おもしろく咲たるを人〳〵いと

くちをしくなといひ侍けれはよめる

弁乳母

かはみえ思ひて花をこそしら風をいとえぬ春はなかりけり

世の中をのかれく右大臣道房かくれ侍ぬときゝて

小弁

かはらぬ身のみこそ事は世の中にたゝきらるゝみいつぬはかね

たくひなくあはれて侍るをまうさせて侍けるに十月

ふるさとにとまるかきりもちりはてしもみちあはれとみえひる

きられ世事まうしてまうて給ひける

弁宮女御

これをつねみなしく人の霜ならはまためくりきて今はこもるか

後朱雀院うせさせ給て上東門院白河に
わたらせ給て嵐いたく吹けれはとめてかの院
小侍もとゝ従内侍のもとにつかはしける

藤原範永朝臣

いにしへをこふるねさめやまさるらむきゝもならはぬ
みねのあらしに

後拾遺和哥集第十六

雑二

入道摂政よかれし侍ける比よるかれなはかると
いはをこせて侍れはいひつかはしける

大納言道綱母

かしはきの杜の下草くれことに猶たのめとやもるをみるみる
おもしといゑてこさせけるに人の夢にかゝるなと
いはて侍ける事

馬内侍

あふことのとけのゝゆめは大井川のむかし夢もいくとせし
もろとよくらなんとたゝこみいひつかはしまかせ

返事によみ侍ける　読人不知

あさましきことゝいひそしみたれはよみ給この御返しあやしのわか

中関白かよひそめ侍ける比よかれして侍けるを

とめてこよひはかへりかさりてこそまたといひて侍

けれはよめる　高内侍

枕わる人やうつしし秋のよをまつるとしれはあけよつ重たる

このことよろしとたとこのかへりよそありへるといひ侍を

きゝて　新左衛門

まれにこそいそも来しかれと泳みとゝめる元のまゝにて

ねさめにもいひける世よかれしくよはてねて

人あやめの根をもはやといひてあやめをこせて

侍けれはとめてかへりてよみ侍ける　小馬命婦

その色の草ともみえすかれにしをいかにいひてかけふはかくへき

たとこの来まうてきてまうてきて侍けるよしねあやめ

ときもてかへりてよみはとめてかくるしあやめ

しとたとこのいひをこせて侍ける返事

和泉式部

かくれなきまこさしも世そあやめのねをとこせよし来まてまれとも

よそのかとみまてきてかけるたとこのとくかきて

小弁

やすらはてたてにたてうきまきのとをさしも思はぬ人もありけり

小式部内侍のもとに二条前太政大臣はしめてまかりぬときゝてつかはしける

堀河右大臣

人しれすねたさもねたしむらさきのねすりの衣うはきなりけり

返し

小式部内侍

ぬれきぬと人にはいはむむらさきのねすりのころもうはきなりとも

平行親義人にて侍りける時人のもとに

かよひつゝわするゝを見あらはして

兵衛内侍

秋はてはくせとし萩の下はさへけやとけさこそつゆ

実成卿のむすめにかよひ侍りけるを義人

行資にあひねときゝて其女の方につかはして

見わすれてよみ侍りける

左兵衛督公信

あさましくたえはてつらん白まゆみもとはいくるいとはくる

大江資相模守に侍りける時もろともにかの

国に下りて侍りけるにもろともにまかれ

ゐれにことゝめをわすれてかへるときゝてつかはしける

相模

あふ坂のせきは心ハかよハねとみし東路ハなほそ恋しけれ大将殿にかよひ侍りける女をもとめける人

みいそかるらんといひ侍りけれハ女のよめる

よみ人しらす

ねぬるよのねぬるのたたくまにぬるハねさめのいけよしやすき

太政大臣のもとにて四月にまゐりて

のをみるにそへてよみ侍りける

藤原基俊母

たむ人のわけ宿ハさけかれ草木も秋の色そ有ける

女のもとより菊のはなをさしそへて

小一条院

あふけみのねのくもこえきし心なれは人道ともへはなかはなかい

たとひのへいけるまとなくなりたむかしなると

いふ

松かとていつたちかへきん人まよハかくれあ

かもちへくるんといふて侍りけれ

和泉式部

いこみかまてもかくれむへそてる心のくはもわたらんこそあらめ

こむこいひてきりわつてくるたとこのもと

かつかりしきる

やまうしてまきみえけるとこそさゝけゆめいつよあけらるそのよさん

後三条院御時よたりしまうし時女房のつほね
の前に柳の枝をさして侍りけるをそれにかき
つけてかへりしらわしその柳なかなくれて
よへの人乃ともたらかとてこれにかきつけゝる
わすれなよめる　藤原顕綱
青柳の糸によみつけゝるくる人ハわすれすとね
皇后宮みさこの女御とまうしける時さとく
まかりてそ家にわすれつるのたゝとめてさらねまく
小さしてれせうらくおとしくさり

後三条院御製
まくらさねよかけのきくもあるおそいかなる前によつるれは忘ん
わすれしといひし侍きる人のわすれくによりてま
くうそこともしけそこそさせて侍ける
馬内侍
むつましき人ならくに味ねらもすまひてまかるよしをきて
しのへまかるとて人のもとへいひつかはして侍ける
相模
いつへ行とハかしハつまてよしと君へいけ人のあるを思ひく
思ふしるたとこゝみ雨の子か来まえてまそてぬまゝら

よしかへりていひをこせて侍りけれは

かんなりのつぼの女房雨を人とりに何となくねきさる袖とぞかん

人のもとにまかりたるにあらさきみやり侍りける

色ましわらひ侍りけれはよめる

なよする人の心はさしものいかにけふはかなくてさしも

たゞこのおもひ侍る世を今さらにいつといひ

ひては雨のはらすなる秋までとなりなむと

まことにつかはしける

大かた山ずみのこゝろしれねときく[illegible]かなしくもなとはおもひ世を

年比とりて侍りける世をたゞこのむくれて[illegible]

くるたびごとに侍りけんよのよめる

よみ人しらず

歌よみつゝおほくまかりける中納言かくれ侍りて[illegible]

女房にたえものことをかまへてまうで物語し侍るを

われをかくとまうでしにてもひとつにりかまへる

色々によそへてみるとめのいひをこせて

侍りけれはよめる　　中納言定頼

いまへのまゝし元今さらにそのよのつゆのとけそも わらし

大貳資通むつましきさまにいひかはすときゝて

相模

まことにや定めなきよの中ぬし天照神のうけひとらぬ世と
元輔かみかなりしまゐる世と申しつかゆかうるとつか
りしをるにあらで又すゝ花よみたまひてとまをして在
まとひつりしまる　　在原元統

おもひもたまへる人は忘れて参らすへくなりぬらんめしい
入道おほきおほいまうち君兵衛佐にて侍りける時一条左
大臣家にまゐりてすゝてかくなむあるとりしあり
よわやといひしにきこせて侍りける色まよある
馬内侍

春雨のふるめかしくしたるれぬかし八千の中にけれ花を

とやしとみ侍りける女のもとにまかりてとての
ふしおそく侍りけるにめるもの見て侍りけれはよめる
清原元輔

いかにのとこよの国やかつかしもしるしてゆくゆくは
赤染衛門にしのひて侍りけるにつかはしける
右兵衛督朝任

君のりる立日浪のいつる花たるまてくこゆるなん
赤染衛門

かせ八唯思ひねるとひとてのまた浪八ゐるみ身
せし

中納言定頼家にまかれてもとやと侍りける比

よみ侍ける木の葉のちるをきゝ侍
ける
相模
人しれす心なからやしくるらむ更行秋のよはのねさめに
あつまよりのほりてあつまへまかりけるにそへ
て侍りけれはよめる　大江匡衡朝臣
あふ坂の関のあなたもまたみねはあつまのこともしられさりけり
十月はかりあふ坂をこえてまかりける人の時雨し
侍りけれはよみ侍りける
馬内侍
かきくもれしくるとならは神無月けしきそらなる人やとまると

大納言行成物かたりし侍りけるに内の御物忌にこ
もれはとていそき帰りてつとめて鳥のこゑにもよほされ
てといひおこせて侍りけれは夜ふかゝりける鳥の
こゑは函谷関のことにやといひつかはしたりけるを
たちかへりこれはあふ坂の関に侍りとあれは
よみ侍ける
清少納言
夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふ坂のせきはゆるさし
又はの杜わかれ侍ける人をとゝめかねて人よりかは
りて
素意法師
あふさかの山へをこえつれと枝かよみえ月の影さへもなし

ちかうなといひてむとよ人の上のいひてこむとひ
ところせき

相模

東宮のみこかくれさせ給ひてのち坂本にてはさしもさ
俊賢朝臣にくれくさまつりしほとにさまさ
まゐるほとのちかきころとも侍りしに梅の花をみて
つかうまつる

近衛姫君

ちりさしとおもふむ梅花ことにあはれなり人かこれをさや
むつましくおほえけることよみたる花をもたる人のなき
のをとおほえてもうちぬ人八千とけぬかしなどいひ
ひけるよしなかひよめる

下野

さていなりのともかとけるこそあはれ
俊通朝臣女をとりけるにこれをみておもしろく
事をいのり侍りしの夏をまちて女乃
乳母のもとにかくてもあらむとおもひつかうまつりて侍
りしにかくよみてつかはしける

四條中將相

いかにとも事ハ夏まてかきまてよむにおもてあるこそ情
深くおほえ侍りしか人そも時因幡守の内
侍よりかけるとてみすきにしこのよの神をも
きこえ申しかんといのりといひて侍りける

逢事によめる　　小侍従

逢ことはなけれど人をまちわびるそのかみとてはとおもくいのちも
思ひ知れ又かなりし侍りきかわをねさまよえ
くるるよはゝそれをつかはしける

伊賀かね

わかるるくれはとねはのねぐらをまちこひとも
たま門にかよふ人につかはしけるとの侍りけれ
ちかひさきりにかけてつかはしける

かね藤原義孝

あまれねむらのくらしとおもはでしよひあはの月とこそおもへ

人のむすめのおさなく侍りけるをたのみてはべりし
契りけることとさもの思ひてのちとてその
あの人のおこもりにかきつかはしける

たゞわかれに

おぼえぬをまてのあはれなく流れてとまらぬとに
秋をまちしとおもひけるめにつかはしける

源道済

いつとなくもしれぬ秋風によそとはなしも萩のしたをね
たとへのすみかなりきりはしたはのみちとみとりの
めぐりくるをまちしと思ひしといひ侍れ

和泉式部

宮はましてきやとなかる秋の夜の木の間の月はもつかまつころ

中納言定頼しのひてまうてきけるを門をおそくあくとていひ侍りけるをとかくいひてあけ侍らさりしかは帰りにける又の日つかはしける

相模

さもこそは心くらへにまけさらめはやくもみえしこまのあしかな

ものいひかよひける人のきこえさせよとてこみなれは

中原長国

あのつゝむあさましくなるゝ人の心をみてそしる又

はかなかりけるかはなそしるもとそてうしろみ侍りけれは

なれにける女のほかにうつりにけれはうらみをこせて

侍りけれは

律師朝範

うらみとはいそのかみとおもひしきしも稲荷にまうて侍りけるを

板野もちての兄の國のみまかりて侍りける比馬にのりてまかりける

のまてはるかにみまかりぬるをみ侍りてなとはさ

もたるすのもかれ又の日つかはしける

相模

はかなくてあるかなとみゆるもみちをはちのまきをもちかへれ

木の間なるのとかにまつ日人のもとにさしてさよ

ことみるにつまてもなとかくはさしもすきみやこもわかれぬるを

返し　　中納言定頼

八重さくらけふ九重のにほひきぬれはかれしとも

三条太政大臣家にて侍ける女房を思ひかへしておくり

侍てみし人をもみさしてわかれにしを侍るに

藤原実方朝臣

わかるゝや九重のしらつゆと人のわかれてや

ある殿の棟小一條院のわかれけるにハいつまてもいはれ

とていふ心地しけるをもよほさせて

侍られた　　中宮内侍

さりともと思ひしむめの園のさくらへわかれむ今ハなにをかなしむ

人よりもさきたちてまつしもそのほかに侍

もとめさせよ　　上総大輔

なれしきハわかるともその園の花こそちるはやめなれと

小一條院かくれさせ給てのちよめる

陽明門院御返

心えぬおもひしるハ我そてくるとそくるしと思ふ嘆し

日に中そとしるへてとゝめしつれくるれとたえ

しにけるものゝ中にて侍まし

といひおこせて侍ける返事に

祭主輔親

かはるぬ人をのこひみれはかへしらぬ花をたれもはかるなるを

人の庭をこそのとくたてまつるよたうとくひ侍き

まへんによみ侍ける

大貳資章

いかなるに人はおもふふきこゆるをたかのうらをそこのそふえ

くちはせぬ人の山吹よそにて日比のつみはゆるせ

といひて侍りしに

和泉式部

とくとくと思ひね八重山吹をゆるといひてわかなことよや

おもふ人のおもひまされとまたくもかはるらし花し

はきてつかはしける

あちきなく思ひこそやれつれつれとひとりやゐての山吹の花

ゆかしさいとゝいまてくちはせぬ男のかたよりあかつきと

まゐりてつかはしける

少将内侍

ねぬるよはのるまほとみえてもかはならす思ひまつる乱

御返事の心はいとかりけるをたえてると

堅くはも又たてと比にあやまちれをかなしく

きゝ文をゆるしてその名をとりつれたまひてつる

つかはしける

式部命婦

紀にたるをうれて何もけのみきんさしきろ物をとるゝ川のゐ

門させくおくとき、かへりにけれ人のもとにつかはし
ける
伊勢の武部
ちりとまおきもはおしき秋のよはかまてかまきみとえなきまさに
内よりそをかへるをと川もんこと故へあさくる人
のちかせて里まてよしをつかりまもる
天の原くるゝ月もいつまて人にしらせてまこそすれ
題しらす　藤原元真
うすゝきまり白雲の山のくれかるやつてにちるに時雨
新家女御
吹風にちりくおきちはつまちれや人の心の秋をしるする

後拾遺和歌抄第十七

雜三

備中守棟利身まかりにけるかはりを人々の
のそみ侍ときこえしにちかくなる人のもとにつかはし
ける　　　　清原元輔

老れくしつゝぬるこそまて揺てきまつのゝ山こえんとすらむ

ゐ中に侍ける比つかさめしを思ひやりて
　　　　源重之

春ことに忘られにける埋木は花の都を思ひこそやれ

つかさめしにも漏れての年みな秋人のたのことし

大井川にまかりて舟にのり侍りけるをよめる
　　　　大江匡衡朝臣

河舟にのりて心みし程とまはこのめさまもかはらぬれ

大納言公任宰相に成侍まゐりける比よみて
つかはしける
　　　　大江為基

世中をきこえし秋のゆるしのかはりならぬのゝ身は有まじ

流さめし侍ける比よめる人のもとにつかはしける
　　　　藤原国行

よつよあらしわたる人のうへもなにかはおなし世にてかねてとまるよし

小一条太大将よろつ給よてよみてつかはして

侍従まれ　　源重之

みちのくのおもふちのまゆみ川やとそに忘れはつるとも世の中

後朱雀院にとゞ年まで乗れたりかはこれまで

きのふは後冷泉院にしてつゝ世紛く文にあひ

まかでてのちは東の院に住みたまへる

天台座主明快

雲の上にこれまでかくれすみなれしよをや又いとゞ月をこそみん

蔵人にて冠給はりけるとよめる

源頼任

かきやられほどみえねぞすみてもとまつる雲の杪

右大弁通俊蔵人頭にて侍りけるをとゞめて

よろこびいひつかはしとて人に侍りける

周防内侍

しらいとをくる人てずはぬぎかへしいそぎたち人のぬれぬ

はるかにのぼる御時蔵人にて侍りけるを冠給はりて

又の日大貳三位のもとにつかはしける

播磨仲経

ぬれぬるにおもひのほかにふかきあかり雲の上ぞ恋しかるべき

おなじほどに蔵人にて侍りけるに世の中かはりて

前蔵人にて侍りけるを当時院御時参の舞人

ふまかさし入て試楽の日よめる

　　　　梅後宗

見ひまやえの文ハみよかきそて人よまでけるをかきすへしとハ

世中をさしみてふかきめて侍る此ハ重菊をと

人てよみ侍ける　　前大納言公任

みすちて咲白菊ハやへくのそれの上もとそ人てまるわるる

としたるさつをめでしろつをと思ひけまそて侍ける

此　　　　藤原道隆朝臣

侍事のあるをや人のねすさん心まもあそてあるよつ事を

たゝかくなる人のさ以乃人さらよし心ひをこせて

侍ける色事よつかしける

　　　　藤原元真

きみをたのみ入て承浜川さつしるとも関をあやめと

すのしつてえ時をそてわる事を思ひけよ侍く

惜慶まるしくかなしれ侍ぬるしたゝさこの松

をみんて　　　藤原義定

かきのことゝおもふかとあるねの尾上の松りまれたて絶わ

世中をしみる比恵慶法師かもとへつかしき

れ　　　　平兼盛

世らをと今ハかすやと思ふすも言る忘しくやすらんとすらん

賀茂成助かもとより雨ふりて雨ふるとたゝへ
ていまそかりけるとよりける返事をつかはすとて
てよみ侍ける　　津守国基
紅葉するかつらのうちにすみよしの松のみひとりみとりなりけれ
つれなくもよはにまかれて年ふる侍ける比世のもとゝし
法師につかはしける　　中納言基長
渡舟のこゝろをわたる人のみきゝはへるすゝよすかなれさ
年比たのみ侍ける牧のつきへあるまちさてけれ
ねん人没ちよし侍ける比たつのすゝうちる
いの仲経かもとにいひつかはしける
源道済母
いかにつらきことのはの露さへをとこらとさこそとまらめ
小一条院東宮とまらせ給ける時きこえはへるへ侍る
御かへりことをまちかねてさしはへりけるにてと
よみ侍ける　　堀川女御
雲ゐまておとのみきゝてまちわたる君のおとたにせぬ有か
関路こそ松の女御にまかて給ていえしく
なかき絶ての比松風の心ちして吹侍ゆきてすて
松風は絶ゆやみにや吹よることもあるへしと人のまちこゝみまち
難しゝ　　源道済

世中を思ひみだれてはべくとうちむる宿に松風をきく

世中もとふにかひなくそうしみ侍る此月を流て

よみ侍ける　藤原為任朝臣

心に八月久しくしも世におもとしまは八元てつあらはれける

ことありて播磨へまかりて侍けるにまたの年五月

五日京へのぼり侍る　中納言隆家

せらみけるよおもひやあやめ草けふは我よねてかへさまる

五月五日服なりける人のもとにつかはしける

小弁

はなとしもあやめもしらでねる我にはいつさへかゝるねのみかかる

静範法師八幡宮の事にかゝりて伊豆国に

ながされて侍りのちの五月に内の大弐三位

もとにたてまつりける　藤原兼房朝臣

五月やみこうのもりの松みれは時なる人をいはひのそるまゝなれ

かへし　大弐三位

まつ見えておもはせるこゝろはきくらう人の神にねぎおもて

思ふときまうしてこそ人をまよりねかはせ

下されたるときゝてよみ侍ける

恵慶法師

よくてまかる人神にまうでてたてまつりける妻の時なるかれ

丹後国にて保昌朝臣に忘られて侍
りける頃鹿のなくをきゝてよめる
和泉式部
ことわりやいかてか鹿のなかさらん今夜はかりの命と思へは
西宮の大まうちきみつくしにまかりてのち
侍ける西宮の家を見てよみ侍ける
恵慶法師
松風も岸うつ浪ももろともにむかしにあらぬ音のするかな
二条前大まうちきみひころわつらひてをこたりて
のち後なとかとはさりつるといひ侍けれはよめる
小式部内侍
しぬはかりなけきにこそはなけきしかいきてとふへき身にしあらねは
題不知
斎宮女御
大空に風待ほとのくものいの心ほそさを思ひやらなむ
かへし
東三条院
思ひやる心はかよふもろともに雨のやとりにぬれしいつかり
世すさはつらけれとこそなれ(?)もつらけれ
きよう
伊勢大輔
なにはかと思ひねてやとはされし有明の月待ちしものを
きのふかなかりける梅の花をそ見て

小大君

あるところにおいて花を見ての梅の花をやさしくハ人を思ハむ
京にまかりて侍りける女をたびたびまかりてたて
後ことおもひつらむ思出侍りける女なり
ちくて京よりのぼるへきほどにいとなく侍りける御方の
の許よりいひつかはしける　よみ人しらず
としのいくとせおもひの露のこそまとひもことのえにやかくると
武人のいくさ廿六騎御霊前まて侍りける
時ともしまかりてまうて人のめよりむとおもひける
かくてせるく後よりれて御後にまたつき

て心うかりけるもの　をんなの心かはりにたるところを
いのちせてまうで侍りければ
世中つねなく侍りけるころよめる

紫式部

物思ひありけるかとおぼえれくておもきものとも思せぬ時よりも
思ふ事へまかりけるにハあるおもひにおもひしとおもひやるまし
たまにも侍りけるはかなき事をて侍りける
てよみ侍りける
いかにたえてしまてかつれなきわひしさハめでたきとかきるらん
世中さはかしく侍りける時中納言定頼の

とふらひつかはしける　堀河右大臣

つねよりも露けかりける比の夕暮はなかく時人かなしつゝとまる

返し　中納言定頼

草のはにをかぬはかりの露の身はいつそのかすにいらんとすらん

世中つねなく侍ける比ひさしくをとせぬ人のもとにつかはしける　赤染衛門

消もあへすはかなき比の露はかりありやなしやと人のとへかし

世中を何にたとへんといふことをかみにおきて
てわたりよみける　源順

世中を何にたとへん秋の田をほのかにてらすよひの稲妻

中関白のいみに法興院にこもりて暁かたに千鳥のなき侍けるを　円松法師

明ぬるかかもの川せにちとりなくけふもはかなくくれんとすらん

文集の蕭々暗雨打窓声といふ心をよめる　大弐高遠

恋しくハ夢にも人をみるへきを窓うつ雨にめをさまして

王昭君をよめる　赤染衛門

歎きこし道の露にもまさりけりなれにし里をこふる泪ハ

僧都懐寿

思ひきやふるき都を立はなれこの国人にならんものとハ

懐円法師

ひとりのみかたみのけふりつきもせぬはかなかりける世にこそありけれ

入道前太政大臣法成寺にて念仏おこなひ
侍りける後夜の時におくれしとて道にいそきま
て侍りけるに侍りけれは侍りかねしをおもひいて
よみ侍りける

井手尼

いまはつくすこえてきのねのわかれ行人ちよのすむ
涙のよそにくものまよひ入道のこゑのきこゆる

小式部の法師によみて侍りける

増基法師

とまれかしいつの山へもおくれたる心よりなほさきもまたせつるかな

かたらひ侍りける人のもとよりよをそむきぬると
あまりにいひて侍りけるをこせて侍りけれは

馬内侍

さよしらすなきけりはやまのすそのをきえてのこれるのふかくそなけり
山の井の御かとて法師になりにける人につかはしける

藤原長能

ちよふるのこのよのかはりたけかたき心をかけし山にすみける世よ
秋篠の里にいへをすみならひてつかはしける

律師長済

まことにやおなし道には入りまゐる枕は手にかはしとなりにけるとやかく

中宮内侍あまになりぬときゝてつかはしける

かねなか朝臣

いそかく花のたもとをたちかへてこけなるまてと思ひたちけん

人〻

中宮内侍

かまてたえぬのこす玉あかとまてすそきもしかくしや

上東門院あまにならせ給ける比よみてきこえさせ給ける

選子内親王

君すらもまことのみちに入ぬなりひとりやなかきやみにまとはん

ある所のみこの子せをとるとき侍きこえしあま

のはらからを人のもとよりをこせ侍とて

よみ人しらす

世をいとひ花ハせし麻衣つまの玉みんかられへしとハ

人〻

伊勢大輔

思ひきや子よりあまるすみそめの玉のあつかひつらむ日ハ

後一条院うせさせ給て世中はかなくおほえ

けれは法師になりてよ河にこもりゐて侍

ける比上東門院あまにならせ給ぬときゝて

権中納言顕基

世を捨て宿を出にし身なれとも猶恋しきハむかしなり

けれ人〻

上東門院

時のまもおもひしまゝにみるくさは世はすてゝもいとゝむかしの

世をそむく人々おほく侍る比

前大納言公任

思しる人はありとも世中をいつをかきりとおもふへきかな

三條院東宮と申ける時法師にまかりなりて

宮の中にまゐらせ侍ける

藤原統理

君に人なれなならひそ奥山に入てのちはわひしかりける

御返し

三条院御製

忘られす思ひ出つゝ山人をしかそこひしく我もなかむる

法師になりてすみ侍ける家に桜の咲て侍るをみて

前中納言義懐

見し人も忘のみゆくふるさとに心なかくもきたる春哉

世をそむきて侍ける比入道中納言の

もとにつかはしける

前大納言公任

谷風になれすといかゝおもふらむ心ははやくすみにしものを

良暹法師大原にこもりぬとききてつかはしける

素意法師

水草ゐしおほろの清水そこすみて心に月の影はうかふや

さひし　　良暹法師

程へてや月もうかはん大原やおほろのしみつすむとしるらん

良暹法師かもとにつかはしける　　藤原國房

思ひやる心さへこそさひしけれ大原山の秋のゆふくれ

おなしころ良暹法師の山こもりして

侍るときゝかくてあんなることくかへり

まうてて侍るをまつかはしける　　律師經範

思ひやるよそのひとたにあはれなる人のとめ

長樂寺にすみ侍りける比人のもとよりとひ

て侍りけれはつかはしける　　上東門院中将

たれかまたとふ人もなき山さとのかけひの水の

ちるなかるすみか

後拾遺和歌抄第十八

雑四

則光朝臣のともにみちの国にくたりてたけくまの松をよみ侍りける

橘季通

たけくまの松はふたきをみやこ人いかゝととはゝみきとこたへん

みちの国にふたゝひくたりて後のたひたけくまの松も侍らさりけれはよめる

能因法師

たけくまの松はこのたひあともなしちとせをへてや我はきつらむ

河原院にてよみ侍りける

大江嘉言

里人のくむたに今はなかるへしいたゐのし水みくさゐにけり

故郷にまかりて松をよみ侍りける

江侍従

年へたる松たになくはあさち原なにかむかしのしるしならまし

もとすみ侍りける家のまへをまかりすくとて松の梢のみえて侍りけれはよめる

右衛門督小弁

年へてそ今はなけれてかゝらぬ松そあはれなりけし

六條中務親王家に子日の松をうへて侍ける
その日人〻まかりてはてに松をうへてよみ
侍ける　源為善朝臣

うゑし人し松なたこそ頼もしけれいつまでの子日まさし
は世中子と八千とせもときそしもとらのとこあ

ある人の松をむすびてをこせて侍ければよ
める　馬内侍

これをけふまつといひつゝむすびかくしたにこそすらしのみねをつけたらなむ

永承四年秋といふことをよめる

大蔵卿師經

みなかみてきぬかへりかゝなびくかはらはあつきをやみてや秋とすみぬ

永承四年内裏歌合に松をよめる
前大納言資仲

いろかへぬ尾上の風に千年まつはかはらぬ
ふかみのこゑを松洞庭にたいふとも人ぞ
つゝしまつりける　御製

万代の秋をすててもちとせまでたえぬ声ねの松かな

題しらず
藤原兼孝

あしはらをねかはまてもちよのあらはれてひとよのちとせとよろ

宇治にて人〻よみ侍りけるに山家松根崩と

ふんをよめる　源経信

摂政すゝめやとハ山とゝ申されて年みえてまかれる人あるし

関白前太政大臣の家にてかれたる滝をよ
み侍ける　藤原範永朝臣

やとゝめていくよへぬらんかれはてゝのたまハいかにひかりけらし

須磨の浦を過侍ける　藤原経衡

たのかさもふのけふさてはすますは須磨の浦や

龍門の瀧にて　中納言定頼

かくなからたえぬ山の瀧糸はみのゝくちをまとはせける

やまひの龍門よりおりて瀧下にてかの
国守義忠朝臣ゟ桃乃花の侍けるをいつえるとい
ひ侍りけれはよめる　弁乳母

ぬいとも手をりて桃花すむ代ゝへる瀧のしら糸

美作守にて侍ける時館の前にて瀧をせ
きいれてよみ侍る　藤原兼房朝臣

せきいれしこゝろハすれてよのうちもみるへき瀧の糸ハ

大覚寺の瀧をみてよみ侍ける

赤染衛門

あせにけるいまたにかゝる瀧つせをはやくそ人ハみるへかりける

法輪にまいりて読侍ける

源道済

年毎にせくとはすれと大井河むかしの名こそなかれたえせね

桂なる所に人々まかりて舟にのりて又こむと云て
後にかの所にはまかりて月のおもしろかりけるに人
くまかりておもひてつかはしけるを詠
侍るにかはりけるとて

祭主輔親

ほけのはなにやとりしゆへはおほ月のかよひまちまちみよ
修理大夫惟正信濃守に侍る時ともにまかりて
みやこにとまりて侍るまのほとりにてよみて侍て

源重之

いつれの宮くにはしれ白糸かくる人も見ねはおもへ有まし

延久五年三月住吉にまいらせ給て帰さに
よませ給ける　後三条院御製

住よしの神はあはれと思ふらんむなしき舟をさしてきつれは

民部卿経信

おきつ風ふきにけらしな住吉の松のしつえをあらふしら浪

花山院の御ともに熊野へまいり侍る道にて
住吉にて読侍ける　恵慶法師

すみよしの浦風いたく吹ぬらし岸うつ浪の声しきるなり
右大将済時すみよしにまうてゝ侍るともにてよ
み侍ける　恵慶法師
あまくたるあら人神のあひおひをいかなる松にきゝておもはん
住吉にまいりてよみ侍ける
平棟仲
わかしかはすてゝかひてん住吉のきしのまつのよはひをもかな
旅人よ侍る時わかのほとなりてあはれなるをよみて
てよみ侍ける
源頼実
思事神ハしるらんすみよしの岸のしら浪たよりなりとも
熊野へまうて侍るにすみよしにまうてゝ経供養侍とて
一　とよみ侍る
増基法師
ときかけて衣の玉はすみの江の神さひにける松のこすゑに
挙周和泉の任はてゝ侍けるのちやまひいと
もくわつらひ侍けるを住吉のたゝりなるとよ
人侍けれはみてくらたてまつりけるに書つ
侍ける
赤染衛門
たのみてハひさしくなりぬすみよしのまつこのたひハしるしみせなん
上東門院住吉にまいらせ給て秋のまつりそ

ふるさとへかへりて世行人によみ侍ける

上東門院新宰相

おもひきや秋まちえてはねもいらぬ八千代まちひの心ちこそすれ

天王寺にまうでてかめゐにてよみ侍る

弁乳母

万代をすめるかめ井の水やさはとみの小河のなかれなるらん

長柄橋にてよみ侍る

前大納言公任

橋柱なからましかはなかれての名をこそきかめあとをみましや

天王寺にまいるとて長柄橋をこえてよみ侍る

赤染衛門

われとてもつくるの橋はくちにけりなにのことものこる世なれは

上東門院住吉にまいらせ給てかへさに人々

哥よみ侍ける

伊勢大輔

いにしへのふるきところをおとなれはむかしなからの橋をこそみれ

わきのこととゆふあふ子よそてよみ侍る

道命法師

花ならぬわきのみ蘭をとりてこそちらぬためしにまゐる御幣

くまのにまうでてあとむつむし侍るに人

くさりはかなるひとしや神もゆるしたまはん

なといひ侍るかとよみとめし河のなともに
かしこまりけるほとの侍られんよあまた

懐寿法師

山のさかりしまいるく侍りなし事人々けはやきめん
たえましままりてのち侍るに陰陽師朝臣難波と
いふ所に侍るときゝてまかりあひてのちあひて
まかりのほりけるよるまかりよしまかりし
むすこせて侍りける道よりつかはしける

藤原孝善

わかれ路はつゐてまつらすれと心さきみつかけはよこそ[illegible]

賀茂にまうてたる男みちにてぬのはかまのあらぬえ
ほとゝころひて侍るをみて又まうてたる女乃
いひつかはしける　よみ人しらす

道とをみたちぬへかりし袂の旅に何をとて心ほそさを
そへ

ゆふたすき袂にかけていのりこし神のしるしをけふそみる哉
家のかへしにかきつけて侍るをみて書しるし侍る

安法法師

とのへかもみやしろのゆふたすきゝゆるあしひきのかけてそ思ふ

実方朝臣のもとにまうてきてかへりこそ[illegible]

侍るに世のなからぬ人まておほく侍りけれはと
ハせて侍りけれハ侍りけるつとめて世のつねに
きける　　　　よみ人しらす
ぬれぬよの心あるらしかやみすそとおもへとゝいふに心ハましてや
返し　　　　藤原実方朝臣
ひとやそのときみまへのわきまへはのくてやそこよそてやりや八
をつせよまいりて侍りけるとみいふにせん
とし侍りけるに花をみてれとしれなれとも人
ほとてよめる　　　　赤染衛門
ろのとせ人まかりぬへきうちにせのよの中をいひそめまし
貫之集をかりて返すとてよみ侍りける
　　　　恵慶法師
ひとまきにちゝのこかねをこめたれハ人こそなけれこゑハのこれり
返し　　　　紀時文
いにしへのちゝのこかねハかきりあるをあふはかりなききみか玉つさ
紀時文かもとへつかはしける
　　　　清原元輔
かへしけむ昔の人の玉つさをきゝてそそゝく老の涙を
家集見たくしてかりつかはしける
　　　　藤原輔親

これのみならず名誉多かりける中の歌はちらんとすらん

伊勢大輔か集を人のかりにおこせて侍りける

につかはしけるとて　康資王母

いつはりかはあらんやよし〳〵のもとのこゝろを守つゝ見よとて

後三条院の御時月あかゝりける夜侍る人々

おほく庭におりて御覧しけるに人々おほく

かはらけにつきて歌よみなと仰せ侍られけれ

よめる　後三条院坊城京

いにしへの家の風こそうれしけれかゝることのはちりくと思へは

七月七日まうちきみ蒼月みなあつまりあそひけるに

まうち君義人は後拾遺の納言のつかねよりそふ

と人々いひあひて歌ひ侍けるを九月の比に

もとめいてまうてゝ侍りけるに人に勅書つま

させ給ける　後三条院御製

秋風にあふことのはやちりにけむその夜の月のもりにけるかな

義忠朝臣いさかひの事ありて又とみ

につかはしまゐらせてつかはしける　赤染衛門

はるかなるやおなし秋の月はかりあはれとも思ひまさりたる人

つゝむといひて乃命法師のもとによりてきたる人

の後侍ける　よみ人しられ
跡やとむ命ならぬ人の世にながれてもいかに見よ忘
ちかけ本に侍りけるをきゝて侍りけれは村
しせゐ文のもとよりおそくなりければ花んと
こゝろばへをこせむかしなり事に

親子内親王

いそぎまかりて独よりあるの文をやりて山吹の花
良暹法師 柱いひはべる人にあひ初まかりし
そひ侍りけれは侍りけれはあはれかの人に
おもしろといひをこせて侍りければつかはしける

藤原孝善

あさゆふ八つのつゆをもしんねたてそすゑとおもへくは秋を
かたくみひかりたとこの世のみものつまへもしとそて斎
あさ侍りけれてわつかの思事をよみ侍ける

和泉式部

かくへそこくさし事ともおほえすれしやさうん恵のまことなし
五節命婦のもとふたつ侍る年のひまかふと
きゝてなにとなくその命婦のもとにまうでを
世侍ける　六條斎院宣旨
年のひねをきゝてこゝろやなれしはえかぶる袖ねのかはしたるなれ

ろしきあるよし侍りける比しらぬ人のもとにてちらし

侍りけるによみつかはしける　馬内侍

うきよりもろこしの子の浦みへせむとするはすゝのちはきしや

はおもふものゝつみをとりて侍りけるを大盤所に不

まちし人のこゝろ侍りけれとてつかはれとてさ人になけ

つま侍りける

藤原顕綱朝臣

たえつれはとくも見ゆる神のしめなはいさやいかなる人の

れをいふらん

後拾遺和歌抄第十九

雑五

後冷泉院春宮と申しける時一条院をしめ

てまいり給ひけるをとなむいひて事やありけんよ

み侍りける

相模弁

あめのうちをもたのくもすねしのびてこそ二葉の松をみんと思ひし

二条院まゐりにやよまゐりて参りたりけるよし

きこしめして中宮のこのあつまりおほせまつることを

いつ人の侍りけれ　大弐三位

三のひねのうちぬけりかくれ命せちりしと思ひつる比の枝し

返し　　　　　　　むね弁

春の日にかへてきかせハいましへの秋つしやとちとせな（よし）

後花の院かくこみ文とかけるに時人のなのこと

上一品文の女房とさたまりて梅花をもてあ

そひけるよれ中文みよれを侍りときまて

つかはしける　　　源ね兼朝臣

花さそふみ人山の嵐の世にすそ秋の夕暮

三條院東宮と申しける時式部卿敦儀親

王むまれて侍けるにかはしうちとりてもすれ

つもて侍ける　　　入道前太政大臣

よろつ代を云のまかせといのりて立ける言の葉とそみよ

御返し　　　三條院御製

前のちかすけ御傍をさふらひて世子まいらせ日本

或人云この比舞ハかれたる人おほ時ハ子ほらの木

ちらなそ侍りけれはのまそかの大将のよま

もらておはけのかはしるるをおかしけれはよませ

行けるなし

一条摂政のかくれ侍て後おほ義孝こしやせて

侍ける七年よむつしき思ひてくよみ侍ける

法性寺太政大臣

ちよふれはきみかひくむつしきのけかれしをまつにいはし

六條左大臣身まかりて後播磨國よりなん侍

まかりしてねのひとしてあそひてなにとよみ侍るとも

人のいひ侍るかはりにしていつまてやおもはき

むよみ侍ける　源相方朝臣

ころねとたかくれいひかひもつきしき尾上のさくらかくうらめし

後一条院のおさなくおはしましける時祭に使

しまゐらいつきのやまて侍るをとりて入道前

太政大臣たまはりてよつらて侍けるをとりてま

て後小太政大臣のもとにつかはしける

選子内親王

比かり出るあふひのけふをみてしかは年へにけるもうれしかりけ

人／

入道前太政大臣

もろかつら二葉なからも君にかくあふひや神のしるしなるらん

後一条院御時賀茂行幸侍ける上東門

院みちよりのこせ給て紫野よりかへらせ給

ける又のひきこえさせ給ける

選子内親王

みゆきせしかものかは浪かへるさにたちやよるとそ待あかしつる

後冷泉院御時上東門院よみゆきありしと

さきらをとくかやとて後しらかは硯の中に
小桜の枝をいれてたてまつらせ給ふとて
九重にまよひかはせましそてよみ侍りける
上東門院中納言
みゆきとかやハうせて今ハ梢の桜ちるとも何
小弁殿よまし侍て木の花人もまたに
あらし侍るを見せて侍る九重に小
六条斎院宣旨
ゆくてやさそふこみゆきとも月のかけなるらん　本ニ
宇治前太政大臣かねて侍る時春日使に
おもむき侍て又の日雲の上の人に侍らさりし大納言
公任のもとへまつりしける
入道前太政大臣
わすれ年の日雲にひかしの心つくしをけふさへ今日
人し　前大納言公任
うまれてつかへつれは雲やまかねの春日の野へのわかな　時ハ
三条前太政大臣かねて侍ける時春日使に
まかりて又の日まかのいふ侍るにしと
入道前太政大臣のもとよりつかはしける
このきさ山まつ日のくみねまつしまかねてこそ　やらそ

上東門院出家の後の三条院にわたらせ
給ひけるに六月ばかりみゆきありてちかき
人〳〵の又めされなどしてまかりへず侍るほどに
をとこどもまかでさせ侍りけるのひまに玉のをを賤
てまいらせよとおほせられけるによみて
まいらせける
伊勢大輔
としたかしみやこは花におもほえけるむかしのうさき
家をすてゝよすとおもはせられしてゆくきしよる
花山院のまひ文とりける時女のいみじう水くき
よろづ給へ書かせ給へとおもはせられけれ
年をへてとめつゝつきせぬ花もみえずしてまかりまうでければ
まかりける人のかへりごとを給はりけるを
源重之
まくらとさえせぬ花は年をへてかはりのかへりまつる
花山院御製
三条院の時大嘗会の御禊などはへりその比
雲の上はよろしく大原にすみ侍りけるおね
みのあまみもとしつかりける
伊勢大輔
世のなかをよしとみつるぞよしあしを 山の御かへしやかて

人へ

か侍井氏

あかし山桜をみてそとおもへつらしとやとてつかはみ安にはまえん
一条院しせさせ給て上東門院にまよりまゐい
て侍ける又の年のはな盛りのむかしを思
そこ人のそのことはれてつれてま侍る
わくにしみそていひける

伊勢大輔

えてみ山井のあさみしハゆまとけさ内ハかへらされらん

中納言定成宰相にて太郎なりとかくなりける
いもうとみ弘徽殿女御のもとに侍ける人に
つれなくてたえぬるを中宮にはへりける人くゐのあ
またてみるしきんもと上をのつまて
兄こむつましくおそれし母子ともいひて絹のこ
みちのくにの子供あつらひの山にたちな
とてさしくるひけのうちをむすひけて
たまわをしてさかこめてその女御のもとより
侍ける人のもとにおくとれあらくそれかうの気
みなとみといふをせてそのほさしきをせる

よみ人しらす

たかさこのこのをやくさしやまでまよひやかをおとれそこ

かくて院は承香殿に御て二条太政大臣中納言に
て参使し侍るとありし綱の守に院乃
くさんかれのかしこれねのえこに続ける女
いまそ使を中宮のくるかへるれ給ふやひか
けとたかくて続の人にありてしかまへて
侍まる

藤原忠純

忍かまゆるよりてやくはやよひまんほとみのかへんくるぬおほき
たる人の式部少輔のかけ見かしつらのこと
すぬにおほきとろきそしておもひしるといまそ

見る人く見侍るにあはすかみのくらしよ
書てむすひつきまゐせ侍ける

選子内親王

神代よりしるしあるとはいひつたふる文かたおそはめてしけれ
一条院の時皇后宮の式部ともなりける
ひ侍りくるひ侍りしよそふる人のつまて侍
まゐるおもひものとみていそせしとおもひまゐるを
まとてむすひ侍くとてよみける

藤原実方朝臣

あはなみ山井のみかたおもてをいつるひものとくる恨ん

おもひきやふるき世の文節にしてこと人にみときゝ
て侍りしをかへしとてつかはしける

源頼家朝臣

よ事り花わかるゝかすみをみるからそのあとのこゝろはみえしゝ
人のこゝろはきえんとおもひてたえしとおもひぬぬ
とききてこと人につきて侍にけれはよめる

法眼源賢

思ひやれつゆのきえゆく枝なれや人のまかせに花とこそ人とは
ちての作法ゐるゝ女をとゝみ侍けるもとにつかは
しける

平正家

一条院御時太弐佐理つくしに侍けるに比年
書をくりしつかはしけれは返事かくそたて
まつらんとて書つくへき歌とてよみまゐらせ侍る
によめる

源重之

故人はいつの松原いけるらんつくしにおはしますらん
ちのもふたまかくて筑前国に侍て年へ
てはるかのおかその国に人かへりてくるは
くるよしにけみのうとこひかしに流れたるを
みてよみ侍ける

藤原基房朝臣

これかへの浦に年へてよる流れもわかる一條にかへす申はる

頼国朝臣紀伊守にて侍りける時あひ具して
あつまにまかりて侍りけることさらにおもひ
いてられてよみ侍ける
　　　　連敏法師
たいの浦よせしと人はいへとまつ人もなき身の浦なる
肥後守義清みまかりて侍ての年の秋さかの
にてかれはみまかりやといひをこせて侍りける也
一　につかはしける
　　　　源兼長
おもひやれこゝろもすせぬ秋の野は草かれゆくと人もなし
おもはまし侍けるなみのまとふたよりを
付てつかはしける　　源兼俊母
白波や菊の花は末流のこゝろみせしの風のたよりは
かなし
　　　　康資王母
吹かせとこゝのかへりはわきまさの花のさかりと見え
津くしよりのかへりとてたよりにまかりける鈴
の菊みおりてゐくるをみて
　　　　大弐高遠
とまりするてわかる露やおくつらん花よりさきにまつそきえぬる
陸奥に侍ける中将実方朝臣のもとに
つかはしける
　　　　藤原実方朝臣

やまひにそへりけるに東路にまかりけるみちにて
かへりける人のもとにみちの国よりいひおこせ
つかはしてよみ侍ける
みちのくに東道の国ゆみえしこそむすめしかりて
実方朝臣みちの国に侍りける時いひつかはしける
大江匡衡朝臣
都にはたれをか君はおもひ出る都の人は君をこふめり
返し
藤原実方朝臣
わすられぬ人のなかにはわすれぬをまつらむ人の中にありやは
摂津国にかよふ人のいまこむといひては
みえさりける京にありけるをききて人につかは
して
赤染衛門
あくそやとちせすなる人はつの国のいくたの杜といひしは
六波羅といふ寺の講にまいり侍りけるに此
寺のかへさ見る車のおほかりけるにたちて侍る
紙をいみもつかはしける
相模
ほのまにて秋に心をよせしよりこころのやまにかかる名も
石山にまいり侍る道にてしるとふ人に
てやとみ侍けるに家あるしの心あるさまなり

尼て侍りしに今思へばはかなきよにあるをなどいひ侍るを
よにさしもといひ侍りしに
和泉式部
思ふらむ程かは心人に見くつるらし住みても山科の里
山階寺供養の後宇治前太政大臣のもとにつかはしける
堀河右大臣
すゝしきのちかひはさてそみるらむ山にたえてし人見えて空や
山里にまかりて思ふ事家経か西八條乃
家あるしときゝて車をひき入て見侍りける
きゝる小難波のちりちらせ侍りていとを
かくて侍りしすまゐの箱の人は見えす重侍
きゝて
伊勢大輔
おもひ枕傍の露ねにありけんや入りのあし北東へるとは
山里にまかりて日くれにければ
源頼実
日も暮れぬ人も帰りぬ山里は峰の嵐の音ばかりして
ふしみといふ所に四條宮の女房あまたあそびて
日くれぬさきに出てんとしければ
橘俊綱朝臣
都人くるれはかへる今よりはふしみの里の名をもたのまし

かつらき人の道とぞ年比あらましてまかりしを

杖によそめくさかりにやあらましかんよみ侍りける

読人不知

花さかぬ宿もむかしの宿ならばかゝる人の心ならまし

むかしの山に二月比公番とて花みると流くる

事侍りその花つゝせむとて人の山に

よしのにさせて侍りけれむかし山にても[illegible]

まうけたる事を思ひて

道仲法師

思ひやる人のみあるをまて花のたよりに山をこえんと

ある年庚申にや屋乃中の琴のおもね

心をよみ侍ける　大中臣能宣

絶にきこえつかなる琴をあはしむのなさきゝまさる[illegible]

入道一品宮に人くまりてあそひ侍りける[illegible]

式部卿敦貞みこまかりて[illegible]かりけ侍るに

たかのみこのもとに侍りける人のもとに又の日よみ

の留のねをりかなしのいひつかはしける[illegible]

みこてまかりて世ことのかなしや人こそ

あれまことのみきゝまさると侍りける[illegible]

桐模

いつ又こほくなる一千首みはえつかしるあしよ八の歯作
人の扇に山さとの人にとはれぬ所なと書たる
をえてよめる　　大中臣能宣朝臣
たのまれけるを見え一る着見えのへすはめまよこゆる山寺
法師の父山のゝまかるをとゝめてよみ侍ける
源重之
つねならぬ山の桜に心いりて池のはちすをいひなはなちそ
人のあやまちをいひてさうけりけるをきゝて
いゝし侍けるに　　在原相頼朝臣
きらゝかにけなる世をめくりしもさの月のまよひけるをきゝしものもさん

をくらの家にすみ侍ける比雨のふりける日
みのかる人侍けれは山吹の枝をおりてとらせて侍けり
心もえてまかりすきて又の日山吹の心もえ
さりしよしいひおこせて侍ける返りにいひ
つかはしける　　中務卿兼明親王
なゝへやへ花はさけとも山吹のみのひとつたになきそあやしき
陸奥守則光蔵人にて侍ける時いはせると
はなれてつかはしける侍けるに人〳〵かへとまて人
くのよろおもむきにあるかたはなれすとはとるまゝ
こひて侍けるをせめてせうとあはれとまかりしと

あつまへいりて上人すけといひおこせて侍りける返事
ふみをてみてつかはしけるに別れの心をそへて
いひおこせよとあるをきゝてまてとひ侍りけれはよめる

清少納言

かへすかへすあかのあたにしかるこそなとゆめかよひみちもやさしく

駿河守國房と東よりのほりてはへるまゝに
道よりの宣旨つくりあつまとてはかはし車
一
あはれ侍りけれはよめる

源頼俊

昔見し花ねはかへりてこそやまみちにはいつとてかへるらん

山にすみ侍りけるころの國よりさそひわたりけるに
良暹法師なとあそひてむかしの
一
事なとひきいてゝいひ侍りけれはよめる

慶範法師

思ひいてたにすらんなたれもしらぬまにひとしく海と子の海ん
津の國のかやにて道雅三位の家まて松
家といひけるを見てはへりけるにひさしくあそひてしつ
人さかりとつけるといひてよみ侍りける

堀川内大臣

濱茅生にあれにしもとの松はたかうゑけむよきかれ

前伊勢守義孝か流前大路上下のもとや
みくまのとまうてゝつかはしける

天台座主明快

いかにのまゆとしめなみもあらねとも見えをみやこくは
ならてくみとつ

後拾遺和歌抄第二十

雑六

神祇

長元四年六月十七日に伊勢の斎宮内宮に
まゐりて侍りけるにはかに雨ふり風吹きていつ
きみつから託宣して祭主輔親をめして御
酒のみまゐるとおほせられけるにたいてかはら
けみまはしてかはらけたまはすとてよませ
給ひける

さかつきにさやけきかけのみえてねまかたのおそれ[illegible]はあらしとそ
思

御和哥そへてよつかはしける

参議浦範

たかはちかむかしにほひけちかうなけくらもるこゝろむ神

たかさにはちを抜て侍るかにすまゐりて

みえし河に浮のちはるも侍るとことそてよみける

和泉式部

おもひあまりはあらたむかしのはなくなれいつしかもとそこゝろ

返し

たかやまにあきておつる流世にもちはつとえもおはるといひて

はるかきよりのかみのはなちるたとこのなかそて

和泉式部が母はまきもとさとえんといひてる

へつら

世中はかく侍るも時移りのとほまことそて

一 参つりまつりへきを歌よまれなんといひて

侍れと後侍ける 在原業平

言の葉のとよめそるたれかとおもてしるとひのものそれるこすこその

今もなほおもひする心根はまよはしける花のちよるまさりける 野よ

此行式人会世中はかくし侍れしたるてる乃

小野小町なとひたる神をいもひておれやまもしみ 馬イ

とてよろこひ給ひなとたるむしといひてあんしける

いかにしよよみてしまてかへらむと侍ける

恵慶法師

いかにし山ミの玉拾らたてわかねすことえと秋をこえよ

住吉の家ノつかしの日書つけ侍ける

山口重如

すみよしの松さへかはる物ならはむかしの事をたれにとはまし

一条院御時はしめて松尾の行幸侍けるに

うたふへき哥のつかうまつりしに

源兼隆

千早振松の尾山のかけ見れはけふそちとせのはしめなりける

後三条院御時はしめて日吉社に行幸侍ける

かおけよあそひにうたふへき千年のたかせ事とて

よみ侍ける

大弐実政

あきらけき日吉の御神君かため山のかひある万代やへむ

同し御時祇園に行幸侍けるにあそひにうたふへき哥めしけれはよめる

藤原経衡

千早振神のたちひめこ松万代へてきえしあるは

大原野祭の上へまいりて侍けるに雪の

ふりけるをみてよみ侍ける

左中弁伊房

榊葉にゆふしてかけしわか神のみをゝやとそしく

式部大輔資業伊予守にて侍りける時彼国の

三島明神にあつまあそひしてたてまつりけるを

よめる　　能因法師

うとはまにあまのはころもむかしきてふりけん袖やけふのはふりこ

大弐成章肥後守にて侍りける時阿蘇社に

御装束してたてまつり侍りけるにかの国の女のよみ

侍りける　　よみ人しらす

あめのしたはくゝむ神のみそなれはゆたけにそたつみつのひろまへ

八幡にまうてゝ読侍ける　　増基法師

ちかひてそまもるいかなる神の心をくみてしるらん

住吉にまうてゝ読侍ける　　蓮仲法師

すみよしの松のしつえに神さひてみとりにみゆるあけの玉垣

いし水にまうてて侍りける女の杉の木のもとに

住吉の社をいはひて侍る所にて社のはしら

に書つけ侍る　　よみ人しらす

さもこそはやとはかはらめ住吉の松さへ杉にまけにけるかな

まゐねよりまていつれはつまを侍ける

藤原時房

足まちる河のみなにそなかれてすゑは人をわたる（延べ）給ひ

後の世の法の御時に宮の御念誦のまえのたまのをさしてよみ侍ける

藤原範永朝臣

はやくよりみつゝすの山の神はおほのしるしみえ

ふたつはへし

釋教

山階寺の涅槃會にまうでてよみ侍ける

光源法師

いにしへのわかれのにはにあへりともけふの涙ぞなみだならまし

律師慶暹

はかなくもけふのわかれにおくれたるたまつゆはけさとこそ見

二月十五日の夜中ばかりに伊勢大輔がもとに

つかはしける

慶範法師

いかなれば今宵の月のさ夜中にてらしもはてで入りしなるらん

返し

伊勢大輔

せきそこら浪月はなしけるに中へおくれやうとおもひこまつとて　　兄

二月十五日夜の月のおもしろく侍りけるに大江佐国にまかりて

よみつかはしける　　　よみ人しらず

山のはに入りにし夜半の月なれとなこりはまたさやけかりけれ

太皇太后宮東三条にて寛和絵あはせし侍りけるに

其の御堂にて宇治前太政大臣の扇みせ侍りけるに

書付侍りける　　　伊勢大輔

つきもせぬちよをいはひてくらふしの山のおもひあまりみえぬのみかれ

職法をこゝろにまかせてよろしんとて国さ

防門侍のもとに小菊をおくり侍りけるに

侍りける返事によみ侍りける　　　弁乳母

八重菊にはちすの露をおきそへてこゝのしなまてうつろはすかな

太皇太后宮五部大乗経供養せさせ給ひけるに

法花経にあたる日よみ侍りける　　　康資王母

まれなりける人のみのり花にをく露やはらそて我の玉とはみえ

右近御門右大臣家の女房車二両にあひ

て菩提講にまゐりて侍りけるに一両の車よりまかれ

たりける車よりつかはしけれは今ひとつの

車よのりたる人講よあひて後よ人々よくる
人のもとよつかはしける
よみ人しらす
をろかなるみ車よのりしかとワれも一味の雨よぬれける
月輪観をよめる　僧都覚超
月のわよ心をかけしゆふへよりよろつの事を夢よみるかな
維摩経十喩のなかよ此身ハ芭蕉のことしと
いふ心を　前大納言公任
風吹ハまつやふれぬる草葉よそふるからよ袖そ露けき
同喩のなかよ此身ハ水月のことしといふこゝろ

歌よめる　小弁
常ならぬわか身ハ水の月なれハ世よすみとけん事もおもはれと
三界唯一心　伊勢大輔
ちる花も惜まハとまれ世の中ハ心のほかのものとやハきく
化城喩品　赤染衛門
あしくてをみやとやみやとあすハまことの道をいそくへきかな
康資王母
道とほみ中空よてやかへらましおもへハ仮の宿そうれしき
五百弟子品　赤染衛門
衣なる玉ともかけてしらさりきゑひさめてこそうれしかりけれ

寿量品　　　　康資王母

わしの山へたつる雲やふかゝらむつねにすむなる月をみぬかな

普門品

世をすくふうちには誰かいらさらむあまねきかとは人しさゝねは

書写の上人結縁経供養し侍けるに人々

おほく布施をゝくりけるに思ふ心やあり

けんしはしとらさりけれは

遊女宮木

津の国の難波のことかのりならぬあそひたはふれまてとこそきけ

誹諧哥

題しらす　　　読人不知

すゑのよのすゑをかけてくきこゆるは花さかりをもまつにけれはや

播磨守通人かの国よりのほりてけるに海の松を奇

みにおくり侍るとてかの国の松をまつへ人とつてふけと

あかしへむとよみて侍けるをきゝて

よみ侍ける　　　僧正深覚

たきゝやの松をすてたてを人といふよくあるにはあらぬゆへ

たいしらす　　　源道済

ほのさくる梅を人のたをりしや梅のあたりに梅ちらすらむ

藤原実方朝臣

よろちぬ花もやあるとつねよりもまさりてけふはにほふらむ

とちせよりこ三月三日に人の桃の花をおくりて

大江嘉言

桃の花やとおもひしにあらさりけるものを人のたのむらむ

三条太政大臣の御ことゝ侍るみの人の娘にす
てかよひ侍ける女のもとにやりけるそむすめ
をいとおもはしくさんにみまいらせていらむ
侍けるに三月三日かのやのあるしのみちよの
ともみくとをむしして侍るによめる

藤原実方朝臣

人のよみちまいりてつかりまいらせけるのよしもくさかむ

六月祓をよみ侍ける

和泉式部

なにまみなつきねとてあすのくるまとまちてそ
えるらいて侍ける人のもとに香をせめつかはすと
て人のをとふまかりしを御まいらせつるの侍
けるにや七月七日つかはしける

皇太后宮大進奥

来ぬかとよるのひをも七夕にかしてやまけるひのくさとて

小一条院入道右政大臣の桂なる所にて
よろ世絵きとて紅葉をよみ侍ける
堀河右大臣
紅葉ちるをはまこゆつときそしとやまみちのこすけよは紅葉なれ
懐基法師
落つもる庭をしみてこそおもへとうたて嵐のえきよるらん
人のとみもてゆうんいつとも覚すもみぢしれてよめる
よみ人不知
ちるましも大原山のすみつらん昔を今にかへてたしとはかる
たいしらず
天台座主源心
雲のうへにてあふきと見えよてかくえさよはいはまかし
法師のあらすたをたしして侍るをかへすとて
和泉式部
え気をすはたえもしなまほしわかたもはたかやくさと人もこそしれ
たいしらず
はるさめはれねおもてをいとおつけたとかつとかねのこゑや
七月七日よみ月のおとまる更せのあとを
つかしける
藤原義孝
ゆふされはあふきおもふこの此の月よいとく入るをうらみて
三條院御時人々の井よそてちりくる侍るる人

く枕をならしてまかりてそのよしんたえかけて殿上
よりつかはしける　　小大君

道芝やをとろのみちにまとはれてつまこそ草枕なれ

人の草あはせしけるにわすれくさ忍草を
あはせけるにわすれ草勝にけれは

よみ人しらず

まけかたのみそつらかりける忍草にもきえてまされ

入道摂政かれくにてはへるにかよひ侍りける比

のちしらうちのやなきむすひつまにわすれ侍るを

かつふてとやまふなとこせて侍られてつかはしてそ

よめる　　大納言道綱

思ひいつることもあらしと見てしかとやといふ人こそたえすかれせ

人の七月へいまなんかへるといひけれはよめる

白浪のたちかへるといふをは[illegible]のとまりれよかし

めのとせんとてまうてきたるめのちのかすく侍られ

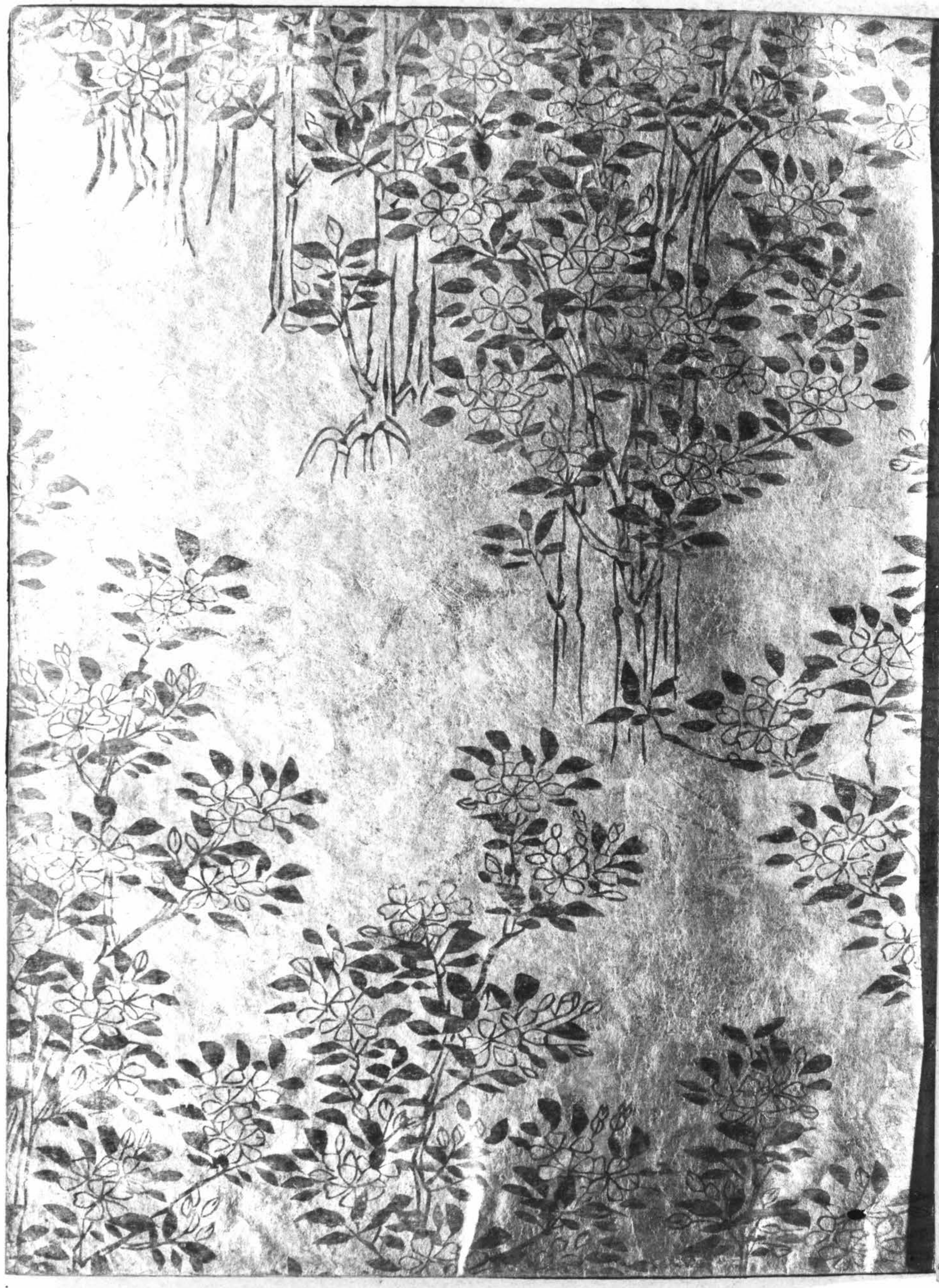
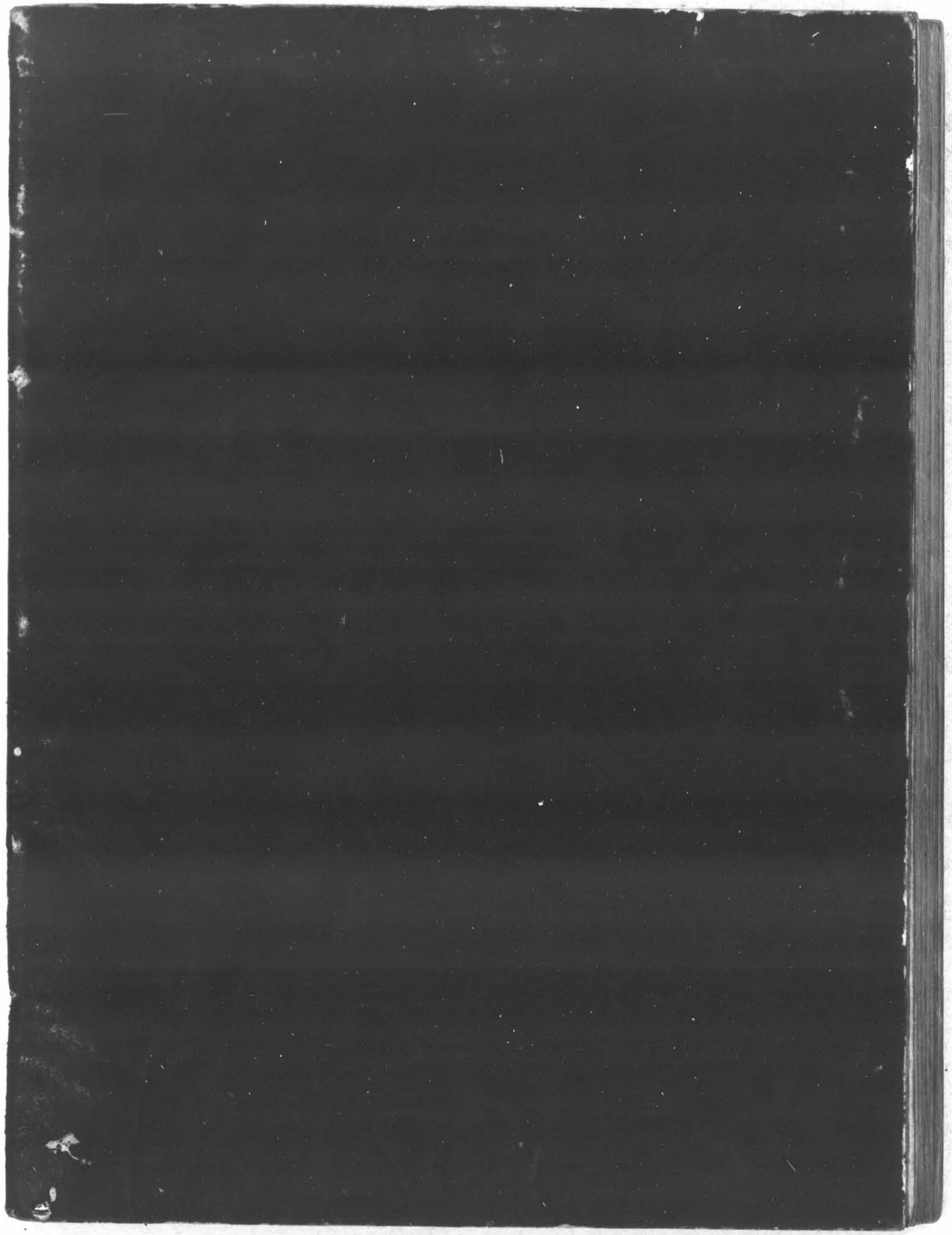
たちよみ侍ける　　大江匡衡朝臣

さられくし思ひけるちもなくてみるせみなのめのとせんとは

返し　　赤染衛門

さりともとあれやまさかりしこゝろみかわらにはまて　あつまへつかす

九州大學圖書印



九州大學圖書館